
A new adventure and bonds

夕陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A new adventure and bonds

【Nコード】

N8579X

【作者名】

夕陽

【あらすじ】

あの、藍染たちとの戦いから約50年。

死神にとっては短く。人間にとっては長い時間がたった。

現世組は皆、尸魂界へ。そして、尸魂界で、一護たちは…。

一護をはじめとする、石田、井上、茶渡。そして、遊子、夏梨。たつきに啓吾、水色を取り巻く死神ストーリーが今、始まる！

同窓会？（前書き）

初めて投稿します。夕陽です。宜しく願います。

同窓会？

新たな冒険

新たな絆

*

*

*

*

あの、だれもが震え上がった、藍染との戦いから約50年。

死神にとっては短い時間。人間にとっては長い時間。

そのため、現世組の死神代行 黒崎一護、滅却師の石田雨竜、人間なのだが、一護といることで才能を開花させた、井上織姫、茶渡泰虎

そして、一護が、藍染と戦っている時、目が覚め霊力があると分かった、有沢竜貴、浅野啓吾、小島水色。

あと、黒崎家の遊子に夏梨の9人はもちろん死んだ。

ちなみにもともと死神だった一心は、一番最後に死んだ夏梨に付き添い尸魂界に、一緒に行った。

遊子を抜いた残りの8人は、「死んだら尸魂界に行く」ということを知っていたので無事に尸魂界にたどり着きそれぞれ流魂街に振り分けられた。

一護、遊子、そして水色は西流魂街1地区「潤林安」。
石田、チャド、井上は南流魂街78地区「戌吊」。残りのたつき（

これからは「たつき」と書く)、啓吾、夏梨、一心は北流魂街80地区「更木^{ザラキ}」に。

みんなばらだがある程度固まってる。

南流魂街78地区に送られた、石田達。そして最も治安が悪いとされている北流魂街に振り分けられた、夏梨たち。

振り分けられた所はばらであるが、皆それぞれどこにいるのかはわかっていた。

(簡単に言えば、最後に死んだ夏梨とともに尸魂界に行き、偶然同じところに振り分けられた一心は、縛道の77天挺空羅^{てんていくわら}でみんなに呼びかけた、ため。)

そこである日みんなは一護のいる西流魂街1地区に集まった。

*

*

*

*

「よう。みんなは久しぶり」

「ひさしぶりー。黒崎君！」

「いっちご——！！会いたかったよ。」

「おーす。啓吾ーお前変わってないな。」

「一護！うで、うで！息が…。」

「おーわりーな啓吾」

「大丈夫ですか？浅野さん。」

「えっなに？なぜに水色、敬gブギヤっ！！。」

「うるさい。もーだまれ！」

「わーあ。たつきちゃん。死んじゃうよー。」

「何言ってんの織姫。もう私たち死んでるのよ！」

「アーそうだった。」

「いち兄！遊子！」

「夏梨ちゃん！お父さん！」

「いちご。ゆず。あいたかったぞー。」

「キモイ！もうこれ以上しゃべるな！」

「ナイス！夏梨！」

「ム。」

「あー。君たち久しぶりの再会のところ悪いんだが、少し黙ってくれないか？」

「……。」

「わりー。石田。」

「分かればいい。」

「ンじゃ。えーと……。」

「……まさかと思うが黒崎。何の用もなしに僕たちをここへ招いたのか？」

石田が、ここまで来るの結構大変なんだぞ、とつぶやき、一護に怨むような視線をぶつけた。

「……。途中で切るな！そんなわけねーよ。」

「えー。ゴホン。ンじゃみんなにいくつか質問するぞ。」

「まず、一つ。みんなはいつごろ死んだ？」

「はいはい。」

井上が手を挙げた。

「ンじゃ井上」

「ゴホン。私は、35歳の時に病気で死んじゃったんだ……。」

「確かそんぐらいの時、織姫、ガンで倒れたね……。」

「そうか。じゃ次。たつき。」

「えっ。あたし。あたしは交通事故。」

「何歳ぐらい？」

「うーん。3……7、8歳かな？」

「そうか。次は……啓吾」

「おれっ。俺も交通事故つか、有沢が死んだ交通事故と同じなんだ

よー。」

「えっうそ！そーいえばあれ3台いつきに事故ったんだっけ。…
てことはあんた…、信号無視したほう？」

たつきは、不敵な笑みを啓吾に向けた。

「へっ…ち、ちがうよ！それもう1台のほう。」

「ほんとーお？」

「ほんと！ほんとにほんとですから！」

「…。あっそう。」

「ふ〜。」

（苦労してるな。啓吾）

一護は心の中でこっそり思った。

「…。じゃ次。水色。」

「ん。僕は、27歳ぐらいに海に行つて、溺死。」

「むごいな」

夏梨がつぶやいた。

「ははっ…。じゃ次、石田」

「ン。僕か。僕はな。やっぱやめた。」

「…「おい。やめんなよ。」「」」

一護、啓吾そしてたつきが突っ込んだ。

「いやー。」

「ごまかすな。」

「厳しいな黒崎。」

「厳しくない。第一みんな答えてるんだから、お前も答えろ。」

「…。」

「あつ。もしかしてすんごく恥ずかしい死に方だったりして。」

夏梨が言った。

「…。」

石田は顔には出していないが、内心めちゃくちゃ焦っていた。

（なんでわかつたんだ。）

「図星か。」

「…。そういう黒崎は、どうして死んだんだ？」

「俺か。俺はっ、ていうか俺たちは、親父が車を運転してる時に、相手の車が突っ込んできた。交通事故。その事故で死んだのが、俺と遊子。」

「そうか。でも君が死んだらすぐに朽木さんとか阿散井君とか来るんじゃないか？」

「もちろん来たぜ。まあ。来たって言っても俺たちが流魂街に振り分けられる場所にな。」

「何故だ。君がきたなら即刻死神にすればいいものを。」

「ああ。ルキアがすぐにでも俺を死神にしようとしてたな。」

「じゃあなんで。」

「俺が断ったんだ。俺が死んだのは、大学生、最後の夏。遊子は大學生の夏だ。もちろんまだ誰も死んでないから知り合いは誰もいない。だからみんなが来るのを待ってたんだよ。なあ。遊子。」

「うん。」

「そうかまあ分かった。ところでなぜ夏梨ちゃんは何故死んだんだ？見た目はずいぶん若いが。」

「あー。私が死んだのは一兄たちが死んだ10年後。つまりあたしの年は30歳。o , k ? ンで、死因は、ひかれそうになっていた親子を助けて死んだ。」

「ああ。そうか。一つだけ聞いていいかい？」

「うん。」

夏梨が答えた。

「後悔してないか？」

「もち！」

夏梨は飛び切りの笑顔で答えた。

「そうかい。」

石田は安心したような声を出した。

「おーい。もういーかい。」

一護が少し大きめの声を出した。

「ああ。もちろん。」

石田は答えた。

「ンじゃ最後にチャド。」

「ム。俺は、……。上から鉄骨が降ってきて死んだ。」

「ン？前にもこんなことなかったか？。」

一護が水色に聞いた。

「あー。うん、あったね。」

「だよな」

「うん」

「…。ちよつと二人とも何話してるの？ねえなに？なんなのー？」

「なんですか。浅野さん。」

「はっ。水色が敬gブギヤ」

「だ・ま・れ」

たつきが、啓吾の腹を踏んだ。

（あははは。さつきもあつたなこの光景。）

井上は内心苦笑した。

「は…い」

啓吾はのどから搾りだいたような声を出した。

「ねーインコの兄ちゃん。」

夏梨がチャドに聞いた。

「インコの兄ちゃんじゃない。茶渡泰虎だ。」

「あっそう。まあそれは置いといて。…。さつき自分の死に方のこと話してるとき細かいことハシヨツただろ。」

「ム。」

（やっと気づいたか）

チャドは思った。

「ム。じゃなくて！ちゃんと答えなよ！えーとなんだっけ。さ、」

「違っぞ夏梨！茶渡兄じゃなく、チャド兄だ！。」

一心がここぞとばかり胸を張って夏梨に言った。

「だまれ親父。」

夏梨が睨んだ。

「はい。」

「んじゃ。チャド兄はどうして死んだの？」

夏梨が改めて聞いた。

「ム。俺は、ビル建設現場の道をとってたら、ベビーカーを押しながら歩いてる婦人の上に鉄骨が降ってきた。それを俺はかばって死んだ」

「ふーん。あたしと同じじゃん。」

「でもよーチャドー。お前高校のときは、上から鉄骨が降ってきても生きてたじゃん。」

一護が聞いた。

「打ち所が悪かったようだ。」

「…。そうか。」

同窓会？（後書き）

初めて投稿します。夕陽です。宜しくお願いします。
誤文字などの指摘がありましたら報告お願いします。
感想お待ちしております。

死神にならないか？（前書き）

第2話、どうぞ！。

死神にならないか？

私たちの運命は

もう一度交わることができるのだろうか？

*

*

*

*

尸魂界。

十三番隊隊舎。

「その話は本当ですか。浮竹隊長！。」
「本当だ。」

ルキアは浮竹の答えを聞き、驚いたような表情をしていた。

「そうですか。私が…。」

「いやなら行かなくていいんだぞ。」

「…いや。行きます。やはりこのことは私が適任だと思いますので。」

「ああ。先生もそうおっしゃっていた。でも一人で行くのか？。」

「ええ。そうですね。でもそうしたら誰を誘おうか…。」

「ああ。そうだな。3番隊の阿散井君なんてどうだ。」

「ええ。それは私も考えたのですが。恋次は、何せ隊長の身ですので。仕事が忙しいかなーと。」

「ああそうか。じゃあ…。そうだな日番谷隊長とかは？特に一護君の妹の夏梨ちゃんだっけ？。」

「はい。」

「喜びそうじゃない。」

「ええ。でも日番谷隊長はちょっと今は、手が離せないそうなので。」

「…。そうか。じゃあやっぱし一人で行くのか?。」

「はい!。」

ルキアは気合が入った声で答えた。

「そうか。まあそんなに難しくはないだろう。もう少ししたらあっちから来そうだけだな。」

「そうですね。」

ルキアは苦笑した。

「それじゃ。行つてきます。」

「おう。」

ルキアは瞬歩で、その場から消えた。

「楽しみかなあ。朽木は。」

浮竹は、ふふつと微笑みながらつぶやいた。

「さあ!今日もしごと。」
ばた。

「キヤー! 浮竹隊長大丈夫ですか?!」

近くで隊長のことを見ていた清音が叫んだ。

(ああ。今日も布団かな。)

浮竹は他人事のように思っていた。

*

*

*

*

西流魂街1地区

「…。結局みんな寿命で死んだんじゃないんだね。」
遊子が言った。

「そうだな。まあそうじゃなきゃみんなこんなに若いわけないしな。」

「一護が苦笑しながら言った。

「ところで黒崎。ほかに僕たちに質問はないのかい？」

「…。」

「お兄ちゃん？。」

「ン。あーあるぜ。もう行っちゃえばぶっちゃけこれ最後の質問だぜ。」

「……………（ゴク）……………」

一護以外のみんながつばを飲み込んだ。

「みんな……。死神になる気はないか？」

「えっ。」

声を出したのは…夏梨だ。

「それ本気？一兄。」

「本気だぜ。」

「みんな多少は霊力があるだろ。」

「うん。まあ。」

答えたのはたつきだ。

「だから誘ってんだ。死神にならないかって。」

「……………。」

みんなは黙りこくった。まあ当然だな。一護はそう思った。

「それほんと！一兄！！」

ゆうついっ夏梨だけが目を輝かせ一護に聞いた。そんな夏梨の態度に驚いたのか、一護は一瞬言葉を失った。

「ああ。まあな。」

「あたし絶対なるよ一兄！。」

「そ、そうか。」

「みんなは？。」

夏梨は生き生きとしてさつきから黙っているみんなに聞いた。

「私はなつてもいいよ。」

井上だ。ひじを曲げる程度に手を挙げながら言った。

「あたしもなっついていいよ！ていうか、私はバリバリなる気満々だったけどな。」

たつきが意気揚揚に答えた。

「はい俺も俺も。」

「僕も。」

「ム。俺も。」

「わ、私もー。」

上から啓吾、水色、チャド、遊子の順だ。

「そうか。」

一護は内心胸をなでおろした。みんなの反応は少し予想外だったからだ。

「残りは…石田だけだな。」

みんなは石田を見た。石田はうつむいていた。
が、急に顔をあげた。

「はあ。君たちなんだい。人の顔をじろじろ見て。僕の顔に何かついてるのか？。」

「ン。いやお前はどうか…。死神になるかどうか。」

「僕は、滅却師だ。^{クインシー}でもまあいい。いいよ暇だから。死神になってあげても。」

（めちゃくちゃ上から目線だ）

一護たちは心の中で思った。

「そうか。じゃみんなで死神になるぞー。」

「何そのやる気のない声は。」

たつきが言った。

「ねえ黒崎君。死神になるには、死神の学校に行かなくちゃいけないんじゃないの？。」

井上が一護に聞いた。

「えっそうなの？。」

啓吾も、一護に問いかけた。

「ああ。そうだ。」

「えっじゃあ、試験とかはあるの。」

「…。じゃあ、それはそこにいる人に説明してもらおうか。」

「護は家の裏を指しながら言った。」

「へっ。そこに誰がいるの?。」

井上が変な声を上げた。

(馬鹿な。一護に私の霊圧がわかるはずが…。)

「いいから出てきなよ。」

「護が呆れていった。」

「出てこないなら迎えに行くよ。ただしあと10秒たったら。」

「10…。9…。」

(どうする出ていくか?。)

「8…。7…。6…。」

(どうする。)

「5…。4…。3…。」

(あーも考えてもらちが明かない。)

「2…。いち。ゼロ。」

シュン。

「ふー。やっと出てきたか。」

今でてきた人物を見てみんなの顔が驚きやら嬉しいやら。

「護は今出てきた人物に話しかけた。

「……。久しぶりだな……。ルキア。」

死神にならないか？（後書き）

どうでしたか？ついにルキア登場です！

誤文字のご指摘、感想お待ちしております。

静霊廷へ（前書き）

ルキア登場しました！ちなみにルキアは13番隊副隊長です。

それでは、第3話スタート！

静霊廷へ

あなたの思い

私の考え

*

*

*

*

「く、朽木さん…。」

「朽木…。」

「朽木さん。」

「朽木さん。」

「ルキ姉。」

「ルキアちゃん。」

「…。」

「朽木さん…。」

「ル、ルキアちゃん!?!?。」

上から、井上、チャド、石田、たつき、夏梨、遊子、一心、水色、
啓吾だ。

「…。」

ルキアは黙って、一護のほうを向いた。

「ン。なんだルキア?。」

ドシ ドシ ドシ ドシ

ルキアがすごい足音を立てながら一護のほうへ近づいた。
「何が…。久しぶり…。だ。」

「へっ!。」

一護は驚いて変な声を上げた。

バン!

「っ!。何すんだよ、ルキア! 痛いじゃないか!。」

「当たり前だ! 痛いように殴ったんだからな!。」

ルキアはまた一護を殴った。

「……………」

みんな目の前の光景に啞然とした。

「ちょっと朽木さん! やめなつて!。」

再び、ルキアが、一護のことを殴った時の音で我に帰った井上が、急いで止めた。

「と、止めるな! 井上! あと一発。あと一発、殴らなければ私の気が収まらない!。」

そう言いながらルキアは、自分の拳に、「ハア!。」と息をかけた。「なんで朽木さん、出てきてそうそう、黒崎君を殴ってんの?。」

「…。あの、一護に私の存在がばれたからだ。」

「おい! ルキア今、俺のことを「あの」って言っただろ! どういう意味だそれ!。」

「フン。そのまんまの意味だ。それ以外になにがある。」

「なんだと! 俺より弱いくせに。」

「貴様こそなんだ。さっきから偉そうに! お前はそんなに偉いのか? もう死神代行ではなかるうに!。」

「だまれ! お前こそ、そんなに偉くなったのか?。」

「フン。」

ルキアはそう言いながら自分の左腕についている、副官掌を見せた。「どうだ!。」

「昇進したのか…。」

石田がつぶやいた。

「ああ。さすがに50年もたつとな。」

「お前その割には、ちつとも成長してねえじゃないか！外見が。」

一護が今思ったことを口にした。

「五月蠅い！たわけが！」

ルキアは、顔を真っ赤にして答えた。

「はいはい。」

慣れたようなやり取りに、一護以外のみんなは、いまだに固まっていた。途中でつぶやいた石田、井上も、再び硬直状態に、戻っていた。

「ルキ姉！！」

一番最初に、硬直を解いたのは、夏梨だ。

「…。なんだ。夏梨か。」

一護が少し驚きつつ、つぶやいた。

（まさか一番最初に、ルキアに声をかけるのが夏梨だとは思わなかった。）

「なんだ。夏梨。」

ルキアが夏梨に問いかけた。

「うん。なんでルキ姉は、ここにいるの？」

（確かにそうだ。なんでルキアがここにいるんだ？）

一護は今の夏梨の問いかけを聞き、思った。

「…。私は、一護たちを迎えにきた。」

「……。へっ？。」

一護がすつとんきような声を上げた。

「…。えっ。なにになに。なんでルキアちゃんが一護たちを迎えに来たの?。」

今の、一護の声を聴き、我に返ったのか、啓吾がルキアに聞いた。

「うむ。私は、一護、遊子が死に、尸魂界へ来たとき、一護を死神に引き入れようとした…。というのは知ってるな。」

ルキアは、皆の顔を見渡しながら言った。

当然みんなは、うなずいた。

「それでその時、一護は断った。」

「うん。」

遊子がうなずいた。

「その時の一護の言い分が、『俺たちが死んだのは、皆より早い。だからここに。知り合いがいねえ。まあここにいるやつら、全員そうだけだな…。けど俺は、しばらくは遊子といたい。しかも俺は死神になる気はねえ。遊子を一人にしたくねえから…。また、俺に死神になるようにお前たち死神が、言いに来るなら、おれの知り合いが全員死んだとき、もう一度来てくれ…。その時までには、答えは用意しとく。』」

…。だから約束どうりに、私は迎えに来たのだ!」

「そうだったんだ…。」

井上がつぶやいた。

「…。黒崎。お前、そんなこと言ってたのか。」

石田が一護に聞いた。

(…。俺、そんなこと言ったか?)

一護は心の中で自分に問いかけていた。

一護は真剣に、今ルキアに聞かれたことを、考えていた。

「…。い…。お…。黒崎!おい。黒崎!。」

考えにふっけていたのか。一護は石田の声を聞き取るのに時間が

かった。

「ン。なんだ、石田。人の耳元で。」

「君が僕の質問を無視したからだ。」

「んだよ。そんなぐらいで。てか、お前いつ俺に質問した?。」

「さつきださつき!もう一度言ってやろうか?。」

「ああ。頼む。」

「…。お前、そんなこと言ったのか?。」

「そんなこと?。」

「さつき朽木さんが言っただことだ。」

(さつき?ああ。あのことが。)

「うん。言っただぜ。」

「そうか。」

「それで。」

「それでって?。」

たつき、に声をかけられ、ふりかえりながら一護は答えた。

「だから、あんたが死神になることについて。」

「ああ。それか。なるぜ死神に。お前らもなるんだろ?。」

「なれるなら、なりたいけど。でも一護は、もともと死神代行だから、学校に行かなくてもいいんじゃないの?。」

たつきが聞いた。

「ン?そうかもな。どうなんだルキア。」

「ん。確かにお前なら、学校に行かなくてはいいかもしれないが、お前、鬼道ができないだろう。」

「ああ。」

「だから、多分だが、その点に関しては、学校に行けと言われると思うが…。」

「だ、そうだ。たつき。」

「ふーん。で?。」

瀟靈廷へ（後書き）

どうですか？ついに一護たちは、瀟靈廷へ出発します。

ちなみに、なぜ一護がルキアの存在に気づいたかは、次回でわかります。

一心の出番少ないですね。多分、次回でしばらくは出番がありません。

誤文字のご指摘等の報告、感想、などなどお待ちしております。

瀟靈廷に、出発だ（前書き）

ルキアたちは、ついに瀟靈廷へ出発です。

4 話目スタート！

瀟靈廷に、出発だ

旅立つときは 仲間とともに

新たな場所に 足を踏み入れる

*

*

*

*

「「「「「「「「「「瀟靈廷?!」「」「」「」「」「」

これからどこに行くのかを、ルキアに聞き、帰ってきた答えが、皆を驚かせた。

「うるさい!そんなに驚かなくていいものを。」

「おいおい。ルキア。なんでいきなり瀟靈廷なんだよ?。」

「ほかに行ける場所があるとでもいうのか?。」

ルキアは一護の問いに、逆に聞いた。

「そりゃ。お前。俺たちが、行けるところの二つや、三つ...。」

「いや。ないぞ黒崎。そんなところは。」

石田が、きっぱりと言った。

「そんなきっぱり言うなよ...。」

「ほーらな、一護。」

「...。」

「あつそつだ。黒崎元隊長。」

「ん。なんだ?。」

今まで出番が少なすぎ、隅っこで落ち込んでた、一心が、顔を挙げた。

「『え——!!』」

遊子、夏梨、一護、の3人は、驚いてものすごい、声を上げた。

「お、親父。隊長だったのか?。」

「おう。あれ言っただけだったか?。」

「ああ。」

「そうか。俺は、7番隊元隊長だ。」

「『『『『『『『『『『『ええ——!!』』』』』』』』」

「」

ここにいる、皆が驚愕した声を上げた。

「貴様ら。うるさいぞ!。」

「『『『『『『『『『『はい。』』』』』』』」

(なんかこんなやり取りさつきもあったような…。)

石田は心の中で思った。

「黒崎元隊長。」

「なんだ。」

「ちよつと…。」

と、言いながらルキアは、手で招くようなしぐさをした。

「ん?。」

「耳を。」

「……………」

「…。それはほんとか?ルキアちゃん。」

「はい。……。あとそのルキアちゃんというのは止めてほしいのですが…。」

「えっ。なんで?。」

「そんなの決まってるだろ。」

今のルキアの声を聴き、夏梨が話に割り込んできた。

「お前にそう呼ばれるのが、キモイからだよひげ。」

（おいおい。夏梨。お前、親父に対しての態度は変わらないんだな…。）
一護は、思った。

「うつそ——ん！」

「とてもいいらしいのですが…。その通りです。」

「ガビ——ン。ひどいよー。ルキ「いいから。黒崎元隊長、早く行ってください！」」

「はい。」

一心は、瞬歩でその場から消えた。

「おい。ルキア。親父はどこに行っただんだ？」

「一護は、まだ知らなくていい。」

「はあ？それ、どういう「さあ、早く、瀨霊廷に行くぞ。」

「おい。ルキア。無視すんな！」

「だまれ！行くぞ！」

「行くのはいいけど。朽木さん。どうやって行くのさ。」

石田が、さっきから疑問だったことをルキアにぶつけた。

「それは、これだ！」

ルキアはそう言いながら、馬を指さした。

「「「「「「「「「「馬あ？」「」「」「」「」」

「ああ。」

「てっ、まさかと思うけど、馬に乗ってトコトコ瀨霊廷に行く…
とかいうんじゃないよね、ルキ姉？。」

夏梨が、疑いの目でルキアを見た。

「そんなわけなからう。この馬は少し特殊でな。技術開発局に、頼んで特別に作ってもらったんだ。」
ルキアが自慢そうに言った。

「そこお前が自慢するところじゃねえだろ。」

一護が、突っ込んだ。

「五月蠅い！黙って聞け！」

「はい。」

「で何が特殊なの。その馬。」

夏梨が、脱線した話を元に戻した。

「よく聞いた。この馬は、霊力があるやつでしか乗れないんだ。しかも、もともと死神だった者は、死神の姿に戻る。」

「えっ。それって。つまり…。」

井上がつぶやいた。

「その馬に乗れば、黒崎は…。」

石田が井上の跡を継いだ。

「「「「「「「「「「死神に戻る?!」「「「「「「「「「

「それほんとか！ルキア!!!」

一護がうれしそうな声を上げた。

「ああ。それでは、説明終わりだ。さあみんな、馬へ乗れ！」

「ああ。」

みんな自分の前に来た、馬に、またがった。

「どうだ。一護、死神に戻ったか?。」

ルキアが一護に問いかけた。

「…。まだみた」

いだ。一護は最後まで言えなかった。体が急に光だしたからだ。

「おい！ルキア、どうなってるんだ!?!」

一護が素っ頓狂な声を出した。

「私にもわからん。なんせ、この馬は、だれにも試したことがないからな。」

「はあ？！俺は実験体かよ！。」

「まあそんなところだ。」

「おい！」

一護が、突っ込みを入れた。

「わあ！！。」

一護が急に大声を上げた。

急いで一護のを見た、ルキア、石田、井上、チャド、たつき、啓吾、水色、遊子、夏梨は、言葉を失った。

一護が乗ってる馬、そして一護自身が、思わず目をつぶるほどの、白い光を、発したからだ。

そして、すごい衝撃波とともに、一護の死神としての霊圧が、ルキアたちを襲った。

「あ！」「わ！」

みんなは一瞬、気を失った。

*

*

*

*

「つ。技術開発局の奴ら目……。もっとましには作れぬのか……」

最初に、口を開いたのは、ルキアだ。

「ほんとだよ。」

石田がルキアに同意した。

「たく。一兄は。自分の霊圧ぐらい操作すればいいのに。」

「悪かったな。霊圧操作が下手で！」

「い、兄……。」

「く、黒崎…。」

「黒崎君。」

「一護…。」

「…一護。」

「一護。」

「い、一護。」

「お兄ちゃん…。」

上から、夏梨、石田、井上、チャド、啓吾、水色、たつき、遊子の順だ。

「い、一護！その姿…。」

一護は、死神代行時、また死神がいつも着ている、死覇装を着ていて、背中には、一護の斬魄刀。斬月が、あった。

「ん。ああ。なんか、俺、死神に戻ったみたいだな…。」

「…。」戻ったみたいだな。『じゃ、ないわ戯け!!。』

「んだよ、ルキア。なーにが、『戯け!!』だ。もともと、この馬は、俺が死神に戻るための馬だろ?。」

「まあな。」

少し違うが…。ルキアは思った。

「じゃあ俺が、死神にもっとったから良いんじゃないかねえか。」

「そうだな。」

「ねえ。朽木さん。本当に、瀨霊廷に行くの?」

「ああ。」

「じゃあ早く行こうよ。」

「なんでだ?。」

「あついや。あ、のね。なんか私たちが乗っている、馬。機嫌、悪くなったみたいで…。」

「はあ?。」

ルキアは、驚いた。そして井上に促されるままに、井上たちが乗っている、馬を見た。

「ブルルウ。」

ほんとだ。技術開発局に奴ら目。妙なところに、こだわりよつて。ルキアは、こぶしを握りながら、思った。

「まあいい。皆、それでは、これより瀟靈廷に出発だ!。」

瀟靈廷に、出発だ（後書き）

瀟靈廷になかなか出発しませ——ん！！次話には、出発できるかな？

ついに、一心がいなくなりました。（笑）

なんで、一心がいなくなったのかは、秘密です。

今回の話、なんか短いです。すみません。

誤文字の指摘、感想等、お待ちしております。

瀟靈廷への道のり（前書き）

やっと、ルキアたちは、瀟靈廷へ出発です。

5 話目スタート！

瀟靈廷への道のり

仲間とともに
歩みを進め

仲間とともに
強くなれ

*

*

*

*

「おいルキア。俺どうすれば、いいんだ？」

「なにがだ。」

「いやあ。さつき、俺が死神になったとき、なぜかわからないが、馬が消えたんだ。」

「で？」

「いや。だから、俺はどうすれば、いいのかって聞いているんだけど」

「そんなもの。瞬歩で来ればよかるつ。」

「いや。そうしたら。馬に乗ってる、こいつらはどうするんだ？ 瞬歩の速さに、ついてこれるのか？」

「当たり前だ。この馬をなんだと、思ってるんだ？」

「……。俺を死神にするための馬。」

「馬鹿者！！そんなわけないだろう。この馬は、少しであるが、死神の力を使えるのだ。ただし、この馬に乗ってる者の、霊圧により、多少の差は出るがな。」

「へえ。そうなの。じゃ、俺は瞬歩で行くわ。」

「ああ。そうしてくれ。すう。」

ルキアは、空気を吸った。

「それでは、皆、瀟靈廷へ行くぞ!!。」

「おお！」

「「「」

*

*

*

*

ところ変わって、瀨霊廷内。 十三番隊隊舎

「来るかなあー？一護君は。」

「来るでしょ。あの一護君なら。」

ルキアが、いなくなつてすぐ倒れた、浮竹は八番隊隊長と話をしていた。

「てゆうかさあ。浮竹、もう起き上がつて大丈夫なの？。」

「ん。ああ、大丈夫、大丈夫。さっきは、目眩がしただけだからね。」

「いや、その目眩、普通の人に、とってはものすんごいだつて……。」「まったく。こいつは、自分の体の弱さをそんな簡単に言うかねーえ。普通。」

京楽は、思った。

「京楽は、心配性だなあ。」

「いやあ。浮竹が、倒れると僕は、清音ちゃんと小椿君に怒られるからねえ。」

「あははは。そうだな。」

ドタ ドタ ドタ ドタ ドタ

ガラ

急に障子が開いた。

「報告します。朽木ルキア副隊長が、元死神代行、黒崎一護を死神に戻すことに成功。また、本人は死神の学校。真央霊術院しんおうれいじゅついんに、行き

たいと、言ってる模様です。」

小椿が、ルキアからの報告を浮竹に話した。

「ちょっと——！！それ私が言おうと思ってたのよ！！勝手に言わないでくれる？」

清音が、障子の向こうから、顔を出した。

「そんなの、しらねーよ！大体、地獄蝶が、俺のところに飛んできたんだから、俺が報告するのが、普通だろ——！！」

「あんたの、ところに飛んできたんじゃないくて、たまたま、あんたがいたところに飛んできたんでしょ！！勝手に、自分のところに飛んできたなんて思わないで——！！」

「な、何お——！！。」

「何よ——！！私が何か間違えてるとでも言いたいのか？」

「ああ！そうだよ！」

「じゃあ、言ってみなさいよ！」

「はあ。また始まったよ。」

「始まっちゃったね。」

浮竹、京楽はあきれ顔で言った。

「は——い！ストップ。」

京楽は、大声をだし、二人を制した。

「……。」

「それで？」

「それで？つといわれますと。」

小椿が、不思議そうに言った。

「朽木は今、どこにいるの？」

「はい。それでしたら、今は瀟靈廷に向かつてるそうです。」

小椿の横から、清音が口を挟んだ。

「そうか。」

浮竹、ほっとしたような声を上げた。

*

*

*

*

「よしみんな。馬に瞬歩、させるぞ。」

「てっ。黒崎！馬にどうやって瞬歩させるんだ！」

「さあどうやるんだろうな。」

「おい。」

石田が突っ込んだ。

「お——い。ルキ——ア——！石田達が、どうやって馬に瞬歩させるか聞いてんぞ！」

一護は、家の屋根に乗ってる、ルキアに呼びかけた。

「分かった。ちよつと待ってる。今報告中だ。」

「へーい。」

「まったく、一護は。。。報告します。」

ルキアは地獄蝶に向かって、報告した。

「元死神代行、黒崎一護を死神の姿に戻すことに、成功。また本人は、真央霊術院に行きたいとのことです。報告、終わります。」

*

*

*

*

「馬に、瞬歩させるのは、実はすごく簡単なことだ。馬に乗って『瞬歩したい』と思う、というか、念じるだけだ。」

「ホントー？。」

夏梨が、訝しげに聞いた。

ルキアは、無言で頷いた。

「……………」

みんな、馬を瞬歩させようと、念じた。

その時。

シュン

2〜4匹の馬がいきなり遠くに移動した。
瞬歩した、馬に乗っていたのは、

石田、井上、チャド、そして夏梨だ。

「うむ。石田達は、予想道理じゃな。」
ルキア、一護の後ろで急に声がした。

「よ、夜一さん！」

「夜一殿！」

猫の姿の、夜一が、二人の後ろに座っていた。

「ふむ。夏梨が来るとわな。これは、予想外じゃ。」

「てっ！何でここにいるんすか！夜一さん！」

「なんじゃ。わしが此処にいてはいけないように、聞こえるが。」

「いや。そうは、言っていないけど。」

シュン

また何匹か、瞬歩した。

今度は、水色、たつきだ。

「夏梨ちゃん、どうやってやったの？。」

「念じるだけだよ！遊子！」

「うーん。」

シュン

「わーいできた！」

「やったね遊子！」

パチン！

ふたりは、ハイタッチした。

遊子が瞬歩した。

「おい啓吾！早く来いよ、置いてくぞ！」

「えー。ちょっと待ってよ。…。」

シュン

「やっとできた。」

「お——い。啓吾——お——いて——くぞ——！」

一護たちは、啓吾を置いて、600mぐらい進んだ。

「えー！ ちょっと、待ってよ——護——！」

「早く来いよ…。てっ、夜一さん！なに、何気に俺の方に乗ってるんですか！」

「良いではないか。良いではないか。」

「はい。もういいです。」

*

*

*

＊

「で、ルキア。いつ瀨靈廷につくんだ？」

「もう少しだ。」

「さっきからずっとその答えだぞ！」

「黙ってついてこい。もうすぐだからな。」

「わぁ。」

「どうした井上？」

井上が、急に大声を出した。

「なんか私の馬と、私自身を守るように、オレンジ色の膜が出てきたんだけど…。」

「ほんとだなあ。」

一護はそう言いながら、チョンと、さわつみた。

ジン

この感覚前にもあったような…

一護は井上を守ってる物をさわりながら思った。

何だっけなあ。なんか、井上の、能力だっけなあ。…。

一護はこれが何かを思い出した。

「おい、井上。」

「何？」

「お前のまわりあるオレンジのもの。それ、…。」

「盾舜六花じゃないか？」

「ほえ？。」

「ほえ？じゃなくて。そのオレンジのものは、お前の能力の、盾舜

六花の、三天結盾じゃないかっていつてんだ。」

「たしかに。そういわれるとそうかも。」

井上は、オレンジのものと睨めっこしながら言った。

「だろ。」

「…。ああそういえば、言い忘れていたが、」

ルキアが急に口を挟んできた。

「この馬は、乗ってる者の霊圧によっていろいろ変化するらしい。つまり、斬魄刀の能力と同じ。」

「…。ということは、私の斬魄刀の能力は、盾舜六花ってこと?。」

「そうとも言い切れない。この馬の変化は、乗ってる者の霊圧によって変わるもの…。井上は現世で才能を開花させてるから、単純にその時の名残で、馬の変化が、三天結盾だったということもある。」

「そうなんだあ。」

「なんか僕と、茶渡君も変化してきた。」

「ム。」

「石田の変化ってどんなんだ?。」

一護が石田のほうへ瞬歩した。

「そんなに変化はしてない。しいて言えば、こいつの腹に、クインシークロスが出てきたことか。」

と言いながら、石田は馬の腹を指差した。

「ふーん。チャドは?。」

「ん。」

と言いながらチャドは、馬の腕を指差した。

「おつ。チャドの馬の腕、お前の戦うときの腕になってるじゃん。」

一護は、

まあ、予想はしてたけどな。

とつぶやきながら、瞬歩した。

「うそつけえ。絶対おぬしは予想して、無かつたろう。」

「五月蠅いすつよー。夜一さん。あと予想はしてました!!。」

「ほんとかのー?。」

「護はもう、無視した。」

「あつあの、」

「ン?どうした。遊子。」

「アッ!お兄ちゃん。あのね私の馬もね、変化したの!」

「どう、変化したんだ?。」

「あのね!馬が、全体的に濡れてきたの。これって変化の一部?。」

「どうなんだ?ルキア。」

「ああ。多分遊子は、流水系だな。」

「だってよ、遊子。良かったな!。」

「うん!。」

「ほほー。遊子は流水系か。」

「なんすか夜一さん。いちいち出てきて。」

「なんじゃ。出てきちゃだめなのか?。」

「...。」

「護はまた無視した。」

「ねえ、一兄。あたしも変化したよ!。」

「おつ。夏梨はどう、変化したんだ?。」

「あたしは、なんかこいつらがこつ、電気が流れてるみたいに、ビリツと。」

「ん。夏梨は、鬼道系だな。」

「ふーん。」

「感心なしか。夏梨は...。」

一護は思った。

「流水系に鬼道系。しかも電気ときたか。なかなかいい、組み合わせじゃな。」

また夜一が出てきた。一護は、最初から無視した。

「なんじゃ。つかかってこんのかさみしいの。」

一護はまた無視した。

「なあーちごー。」

「五月蠅いっすよ！夜一さん！！黙っててください！！！！。」
「はい。」

静霊廷への道のり（後書き）

なんか中途半端なところで終わりましたね。（汗）

今回は、なんとなくみんなの斬魄刀の能力を少し公開です！

残りの、たつき、啓吾、水色は次回で。

そういえば、なぜ一護はルキアが来たのか分かったのか…。書いてなかった…。

次回、絶対書きます！

誤文字の指摘、感想などなど、お待ちしております。

静霊廷に到着！（前書き）

ついに静霊廷です。

6話スタート！！

静霊廷に到着！

新たな力

新たな能力

*

*

*

*

「いいなあ。」

たつきがつぶやいた。

「なんで私はでないのかなあ。変化。」

そう言いながら自分が乗ってる、馬を見た。

「ワあ!。」

それを見た瞬間、たつきは大声を上げた。

「どうしたー。たつき。」

一護が瞬歩で飛んできた。

「ついにきたよ。」

たつきは自分の馬を見るような形で止まっていた。

「な、何がきたんだ?。」

一護は、なんか変だなと思いつつ、たつきに聞き返した。

「変化!。」

「ほんとか。良かったな。」

「えっ。たつき姉もきたの。変化。」

「ほんとたつきちゃん！どんな変化なの？」

「よくぞ聞いた。織姫！私の馬の此処、よ——く見てごらん。」
「……。」

一護、夏梨、織姫はたつきが指差した馬のおなかあたりを見た。

なんか色が変わってるなあ。最初は黒だあた気がする。あつ、また変わった。

一護は見ながら思った。

「お——い。ルキア。馬の色が変わるのは何系だ。」

「色が変わるかあ。それは、鬼道系か？夜一殿はどう思いますか？」

「

うむ。」

「おい、ルキア。なんで夜一さんに聞いてんだよ。」

シユン

ルキアが瞬歩して、一護の隣に来た。

「貴様には、関係ないだろ。黙って聞いとけ。」

「……。」

一護は無視した。

「おーい。言ってもよいか？」

夜一が、一護の肩の上で伸びていた。

「はい。」

「色が変わるのは、鬼道系じゃろうな。」

夜一は、ずばり、という感じに言った。

「そうですか。やはり鬼道系。」

「そうなのか。」

一護が会話に割り込んだ。

「なんだ一護。聞いておったのか。」

「聞きたくなくても聞いちゃうんですよ。夜一さん。」

「ああそーかいそーかい。」

夜一は受け流した。

一護は軽く無視した。

「で。たつきは、鬼道系ってことで間違いないんだな。」

「ああ。」

夜一の代わりに、ルキアが答えた。

「そうか。」

一護はそう言い、瞬歩でたつきのもとへ行った。

「おーい。たつき。」

「何、一護。」

「お前の能力分かったぞ。完璧に信用していいのかはわからないけどな。」

「で!。」

たつきの目は期待で輝いてる。

「お前は、やっぱり鬼道だよ。」

「やっぱり。」

「やっぱり、てことは、予想してたんだな。」

「うんまあね。」

「そうか。」

一護はそう言うってから、瞬歩でルキアのところへ移動した。

「ところで一護。」

瞬歩した瞬間に、ルキアが話しかけた。

「何故、あの時私の存在に気付いたのだ?」

ルキアが、悔しそうな眼をしていた。

「あの時って?。」

「一護はルキアが、言ってることが理解できなかった。」

「あの時だ、あ・の・と・き！私が、お前が住んでる家の後ろに隠れてた時だ！。なぜ、お前は私の存在に気付いたのかを聞いておるのだ！」

「。ああ。あれか」

「一護は、理解した。」

「そのことか。見えたんだよ、お前の姿が。」

「！。ほんとか。」

「ああ。」

「そうか、」

ルキアは、そっけなく答えた。

「一護の答えが意外だったようだ。」

「いーちごー。俺反応出ないよー。」

「反応じゃなくて、変化でしょ啓吾。」

ルキアとの話が終わった瞬間、啓吾と水色が話しかけてきた。

「僕は一応出たよ。変化。」

「オー！なんで、俺はいつも最後なのー！」

啓吾が嘆いてるのをよそに、一護は水色に聞いた。

「で、どんな変化だ？」

「なんか馬が、急に暖かくなってきたんだ。」

「それは、炎熱系だな。」

「ルキア！急に割り込んでくるなよ。」

「貴様はいつもやっておるだろう。」

「そう言いルキアはキッと一護を睨んだ。」

「はいはい。」

「ふーん僕は炎熱系か。ほかにも統系ってあるの？」

水色がルキアに聞いた。

ルキアは、頷きながら言った。

「ああ。お前が持つてる炎熱系のほかに、氷雪系、遊子が持つてる、流水系。夏梨、たつきが持つてる鬼道系。そして、一護が持つてる、斬月は直接攻撃系だ。ちなみに私の「袖白雪」は、氷雪系だ。」

「ふーん。」

水色は、あっさり返事をした。

「おい。いーちごー!。」

突然後ろで声がした。振り返ったら啓吾がいた。

「なんだよ。啓吾。」

「俺変化でないんですけど!。」

「へー。もしかしてお前、死神の才能ないかもな。」

「ガビーン!。」

「そう、気を落とすな。啓吾。」

ルキアが声をかけた。

「ルキアちゃん!。」

「馬に変化が出ないのは、一護と同じ、直接攻撃系か馬に変化が出ない、鬼道系か本当に才能がないのかのどれかだ。」

「えっなにそれ。」

「ほら着いたぞ!。」

ルキアは啓吾を無視しながら、言った。

「ついたってどこに?。」

一護はルキアに聞いた。

みんなが瞬歩して、一護の隣に並んだ。

「わあ。」

「久しぶりだな。」

「ム。」

「誰がいるかな?。」

「…ここが。」

「ワオ。」

「へーえ。」

上から、一番最初に一護の隣についた、夏梨。そして、石田、チャド、井上、たつき、啓吾、水色の順だ。

「何言ってるのだ一護。」

「何って…。」

「下を見てみる。」

「えっ。あ…。」

一護は言葉を失った。

「ここは…。」

「瀟靈廷だ。」

瀟靈廷に到着！（後書き）

ついに、瀟靈廷につきました！

この話で、なぜ、一護はルキアの存在に気付いたのか、お分かりいたしましたか？

分かっていただければ幸いです。

あと、余談なんですがルキアが現れて、どこに行くのか一護が聞いたてルキアが答えたセリフと、上の最後のセリフが同じということに気付きました…。
まあいいです。

「A new adventure and bonds」の、番外編始めました！

「A new adventure and bonds」番外編という題名です。

良かったら、読んでみてください。

また、この番外編は皆様からのリクエスト話や、私が思いついたコメディ話、本編では触れられないルキアの昇進の日などを書いていく予定です。

何か、リクエストがありましたら、下の「一言」というところに書いてください。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいという、リクエストなどなど、お待ちしております。

一番隊隊舎（前書き）

特にありません。

7話目どうぞ！

一番隊隊舎

心は

誰かを大切に想うため

誰かを愛しく想うため

誰かを尊く想うため

誰かを護りたいと想うために

「やっと着いたか。」

夜一さんが、一番最初に口を開いた。

「なんすか。夜一さん。まるで何年かぶりに来たみたいな言い方して。」

「ほんとに何年かぶりに来たんじゃ。」

「時々来てたんじゃないんすか。瀟靈廷に。」

「来てないの。かれこれ3〜40年ぐらい。」

「そうなのか、ルキア。」

「ああ。」

ルキアは頷きながら言った。

「そうなのか。」

「それよりさあ。黒崎君。」

井上が目を輝かせて、聞いてきた。

「なんだよ井上。」

「『早く、瀨霊廷に行こうよ！お兄ちゃん、一兄。』」

「ム。」

チャド以外のみんなが、俺に向かって叫んだ。

「分かった、分かったから、もうすぐ行くから。お前ら少しは落ち着けて。」

とか何とか言ってる本人が一番行きたそうなんだけどな…。

石田は一護を見て思った。

「おい、ルキア。早く瀟靈廷に行こうぜ！」

「ああ。みんなついてこい。」

「どこに？」

俺は聞いた。

「？^{じだんぼつ}丹坊のところだ。」

「？丹坊か。元気してるかな、あいつ。」

俺は、そう言って瞬歩で消えた。

みんな俺にならつて、瞬歩で消えた。

*

*

*

*

「よう久しぶりだな。？丹坊。」

俺は、？丹坊に会いそのままの勢いで話していた。

「お。久しぶりだな。一護。」

「ああ。ちょっとそこ通してくんないか？」

「一護の頼みならいいぞ。」

そう言い、？丹坊は自分の後ろにある大きな扉を開けた。

「「「「わーお。「「「「」

夏梨、遊子。そして、啓吾、水色、たつきが感嘆の声を上げた。

「よく、見るよ。ここが瀟霊廷だ。」

一護は、感嘆の声を上げた五人に向かい、言った。

「なんで、一護が言っておるのだ。そこは、私か夜一殿のセリフではないか！」

「そんな固いこと気にするなって。ほら、もうみんな行っちゃったぞ。」

「おい。お前ら、勝手に行くな。」

ルキアが、先の5人を追いかけて行った。

「ほれ。一護もはよ行かんか。置いてきぼりを食らうぞ。」

「はいはい。井上たちは?。」

「前じゃ。」

ほんとに置いてきぼりを食らうとは…。

俺は思った。

*

*

*

*

「よつと。」

俺は、やっとルキアたちに追いついた。

「ちょい待てよ。ルキア。」

「なんだ。あとからくるお前が悪いのであろう!。」

こいつ、副隊長になってから切れやすくなったか?

怒っている、ルキアを見て俺は思った。

「こちらとて、あいつらを追いかけるのに大変なのだ。夏梨はいつの間にかいなくなるし。遊子は、夏梨についていくし。啓吾はギャーギャーわめくし。まともなのは、水色とたつきだけか!。」

「いや、そんなこと、俺に言われても。」

「お前の妹たちが迷子になってるんだぞ!。」

「遊子たちは迷子になったのか?つか、もし迷子になったとしてその馬には、探知機能とかついてないのか?。」

「う…。それは、ついてたような気がする。」

「ついてんじゃねえか。早くそれで探せよ。」

「誰を探すって、一兄。」

後ろで声がした。

俺は振り返った。

「なんだ夏梨いたのか。遊子は？」

「ん。」

夏梨は後ろを指差した。

「なんだよルキア。遊子も夏梨もいるじゃねえかよ。」

「ん……。まあいい。これで全員そろったか？」

「ああ。た、ぶんな。」

俺はみんなを見渡しながら言った。

「それじゃ。護挺十三隊の一番隊隊舎に行くぞ。」

ルキアが言った。

「ねえ、一兄それって何？」

夏梨が聞いてきた。

「ん。そうだなあ。死神の総本山といったところか。」

「ふーん。」

「じゃあ行くぞ。」

ルキアが言った。

シュン

ルキアは瞬歩でその場から消え、先ほどから見えていた大きな建物のところに立っていた。

あいつ、瞬歩できる距離が伸びたな。

俺は、ルキアを見ながら思った。

そしてみんな、その建物に瞬歩した。

*

*

*

*

「ここ、どこ?。」

たつきが聞いた。

「だから、これが一番隊舎。」

俺は答えた。

「それで私たち、この中に入るの?。」

「ああ。まあそんなところだ。」

「そんなところだ。じゃないだろうが。私たちはこれからここに入
って、総隊長殿に会い死神の学校に通うのだろう。」

「えっ。ルキアも通うのか？」

「馬鹿か。私は通わない。副隊長の仕事があるからな。時々顔を見
せに行くぞ。」

「はいはい。」

「ねえ。一兄。あたしたちなんか見られてる気がするんだけど…。」

「私も。」

「私も。」

「俺も。」

「僕も。」

上から、遊子、たつき、啓吾、水色の順。

「まあそつだろうな。俺たちここでは有名人だから。」

「えっそうなの?!。」

夏梨が驚いた声を上げた。

「まあな。あれ、言ってなかったか?。」

「うん。」

「じゃあ。「ストップ。そこまでだ一護。言つとくがお前らのことは死神の学校、真央しんおう霊術院れいじゅつゐんに十分という程授業に出る。あいつらに教えるのはそれからでも遅くなくろう。」

「そうだな。じゃ、夏梨それまで我慢しとけ。」

「一兄たちどんなことしたの。あーもう。早く知りたい!。」

「あはは。まあいい。早く、総隊長に会いに行こうぜルキア。」

「そうだな。」

ルキアは、そう言い一番隊舎の扉を開けた。

一番隊隊舎（後書き）

フ——。やっと、やっと瀨靈廷の一番隊隊舎につきましたね。

なんか、長くありませんでした？

今回は、一護視点で書いてみました。
良くかけてましたか？

番外編のほうも、宜しくお願いします。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。
などなどお待ちしています。

一番隊にて（前書き）

総隊長登場です。

では、第8話でござい！

一番隊にて

私は 世界のすべてを愛し

彼は 世界のすべてを恨む

「おい、ルキア。まだか。」

「まだだ。」

「長くねえか。」

「ああ。長いな。」

「もう20分ぐらい歩いてるぞ。」

「あと10分くらい、歩くぞ。」

「えー。」

私の後ろで、誰かが叫んだ。

まあしょうがないだろう。最初に会った時から休みなしで動いているからな。

一護たちは大丈夫だろう。が、啓吾や遊子たちにはきついだろうな。

実際、あいつらだけ馬に乗ってるのに少しペースが遅い。

私は思った。

「おい。まだか。」

また一護か。

お前は疲れてないだろうに。

私は振り返った。

そしたら驚いた。一護は、遊子を背負っていた。

どうやら疲労で倒れたらしい。

そういえば、あの五人の中で遊子が一番霊圧が低かった。

なるほど。

私は理解した。

さつきから、一護がしつこく「まだか。」と聞いてくる訳を。

遊子を休ましてあげたいのだ。

あの馬は、乗ってるだけで霊力を消耗する。

一護はそれをわかって、遊子を馬から降ろしたのだろうか？

そんなことを考えてると、目的の部屋についた。

「一護、ついたぞ。」

私は、一番最初に一護に声をかけた。

早く遊子を休ましてあげたいだろう。

私なりの気遣いだ。

「お、わりいな。」

一護は、私が言いたいことを理解したようだ。

「ありがとう。」

こんなことで、お礼を言われる筋合いはない。

私はそう思った。

「総隊長。黒崎一護、またその同伴を連れてきました。」

私は、総隊長に報告した。

「うむ。馬はその柱につないどけ。ところで、」

私は、総隊長が仰ったように柱に馬を全部つないだ。

「はい。なんでしょうか。」

「その、黒崎一護の姿が見えないが。」

「あー。一護はたぶん、遊子を寝かしてるかと。」

「誰を寝かせてるって?。」

「一護の妹が倒れてしまったので布団に寝かせてるか…。」

「そうか。まあ良い。早く、黒崎一護をここへ呼ぶように。」

「はい。」

私は、一護が遊子を寝かしている部屋の隅に行った。

「おい、一護。総隊長が呼んでいる。」

「ん。そうか。じゃあ、遊子のこと頼むわ。夏梨。」

「うん。」

一護は、私の呼びかけにすぐに応じた。

「じゃあ。行くか、ルキア。」

「ああ。」

*

*

*

*

「黒崎一護。久しぶりだな。」

「そうっすね。」

「妹は、良いのか?。」

「あー。まあみんなが、見てくれますから。」

「そうか。」

「はい。それで、」

「うむ。これから一週間後。おぬしらを、死神の学校「真央霊術院」の、編入入学を許可する。それまでの時間は自由に動いていいぞ。一週間後に一番隊隊舎に集合。お主も会いたい奴がおるじやろう。」

「はい。ありがとうございます。」

「失礼します。」

「うむ。」

*

*

*

*

「おい、夏梨。遊子は大丈夫か?。」

「アッ、一兄。うん。遊子は大丈夫。ところで話は?。」

「終わった。おい、皆。」

一護は、皆に向かって言った。

「学校への入学は、一週間後。それまでは自由行動だそうだ。けどここに来たことのない、遊子、夏梨。啓吾、水色、たつきは、ここに来たことのある、井上、石田、チャドか俺と一緒に行動するよに。」

私は、驚いた。

一護の言い分が、意外と筋が通ってたからだ。

「分かった。」

代表として、たつきが答えた。

「じゃあ、皆自由行動な。俺、行きたいところあるんだ。」

「遊子と夏梨は俺と来い。啓吾たちは、好きなように。」

「じゃあ。」

シュン

一護は、遊子、夏梨と手をつないで瞬歩で消えた。

一番隊にて（後書き）

短い！

自分でも驚きました。

今回は、ルキア視点で書いてみました。

なんかルキア視点で書いてると、話が暗い気がします。

どう思いますか？

今日は、休みなのでどんどん更新しちゃいますよ！

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいという、リクエストなどなど、お待ちしております。

十番隊（前書き）

今日、3話目の投稿です。

第9話スタート！

十番隊

人は 人と書き 「天使」 と読み

人は 人と書き 「悪魔」 と読む

「とりあえず、此処か。」

俺は十番隊舎の前で止まった。

「よし。目あけていいぞ。遊子、夏梨。」

「ん。」

遊子と夏梨が目を開けた。

「アッここ。」

「なんだ夏梨。ここがどこかわかるのか?。」

「うん。ここ、冬獅郎のところでしょ。」

「ああ。なんだ知り合いか?。」

「まあそんなとこ。」

「ねーね、夏梨ちゃん。何の話？」

「うん。それはね…。」

夏梨は、話し出した。

「あのね、あたしたちがまだ5年の頃。」

「おい、夏梨、入るぞ。話なら、歩きながら言え。」

「分かった。」

「夏梨ちゃん続き、続き。」

「うん。その時あたしたちは、サッカーをしようとしてね。」

「入るぞー。」

俺は堂々と、扉を開けた。

*

*

*

*

「松本———！！。」

「オッ、やってるやってる。」

「何が、やってるの一兄。」

「この声聞こえるか？。」

俺は夏梨に聞いた。

「こら松本——！逃げるな——！」

冬獅郎が叫んでる。

夏梨は、笑った。

「聞こえる、聞こえる。」

「この声が聞こえる方向に行くと、冬獅郎がいるってわけよ。」

「なーる。でも一兄。なんか声が近づいてきてない？」

「あー。言われると、そうかも。」

*

*

*

「松本逃げるな！」

ゴン ガン

冬獅郎が、氷輪丸を振り回した。

「わー。タイチヨー！隊舎壊しちゃいけませんよ！」

「お前が大人しくつかまってくれるな……。」

らな。冬獅郎は言葉を途中で切った。

「ん。どうしたんですか？ 隊「黒崎、松本を捕まえろ！」

「はあ？。」

乱菊は急いで前を見た。だが時すでに遅し。

*

*

*

俺は、反射的にこっちに走ってくる人を捕まえた。

死覇装の、襟元を。

冬獅郎は、松本って言ってたから、乱菊さんか。

また仕事サボったのか？

「ふー。助かったぜ黒崎。ていうか、お前いつここに来たんだ？」

「やだー。隊長！ 忘れちゃったんですか？ さっき、地獄蝶が来て言
ってたじゃないですか。『黒崎一護が来た。』って。」

乱菊さんが、俺の手につかまったまま、話した。

綺麗な髪が揺れた。

「お前のせいで聞き損ねたんだろうが、松本———！」

「す、すいませんでした——。」

乱菊さんは、そう言って逃げるそぶりを見せたが、失敗。

冬獅郎につかまった。

「まあいい。来い、黒崎。」

「一兄だけじゃないんだけど。」

急に後ろから声がした。

冬獅郎の肩が、「ピクツ。」と動いたような気がした。気のせいかな？

「か、夏梨。」

冬獅郎は振り返りながら言った。

「大当たり。」

「お前らも来てたのか。ん。後ろにいるやつは？」

「あたしの双子のお姉ちゃんの遊子。」

「あ、あの。初めまして。黒崎遊子といます。」

「こちらこそ。十番隊隊長、日番谷 冬獅郎だ。」

「小さな隊長さんだね。」

「余計な御世話だ。」

確かに

俺は思った。

50年もたっているのに冬獅郎の背は、10?程度しか伸びてなかった。

「じゃあ、宜しく。日番谷君。」

「日番谷隊長だ。」

たく。この兄弟はそろってこうなのか？

冬獅郎は思った。

「…。まあいい。来い。」

「「「ハイ。」」」

一護、遊子、夏梨は、そろって返事をした。

ソロ——リ。

乱菊さんが、逃げようとしていた。

「こら、松本！逃げるな！お前は別だ。とりあえず来い。」

「…。はい。」

最後のチャンスだと思ったのに。

乱菊は思った。

*

*

*

*

「で、お前はなんでここに来たんだ。」

カリカリ

「ん。暇つぶしだよ、暇つぶし。俺たち、一週間後に、えーと……。
ああそうだ。真央霊術院に行くんだ。で、それまでいろんなところま
わるかなーで。」

カリカリ

「それで、最初に来たのがここってわけか。」

カリカリ

「ま、そんなとこだ。」

「おい。松本、それが終わったらこっちな。」

「はい。」

乱菊さんはさっき、冬獅郎につかまってから今まで貯めてた分を全部やらされている。

もう、三十分ぐらい、やっているのに、まだまだ書類の山が4つぐらい残っている。

どれだけ貯めてたんだ。

俺は、思った。

「ねーえ冬獅郎。」

夏梨が、冬獅郎に話しかけた。

「日番谷隊長だ。」

「なんかないの？」

「なんかつてなんだ。」

「なんかだよ。」

「俺は仕事で忙しんだ。用がないなら早く、出て行ってくれ。」

「やだー。」

「お兄ちゃん。私、ちょっと寝るね。」

遊子が、俺に話しかけてきた。

「おー寝ろ寝ろー。今日はここに泊まるぞ。」

「おい、勝手に決めるな。」

「良いだろ、別に。俺たち泊まるところねえんだよ。」

「そんなの、朽木のところに泊まればいいだろ。」

「ルキアのここは最後。」

「…。ほかに泊まるところでも考えてんのか?。」

「まあな。明日は、恋次のところ。明後日も恋次のところで、なんかいいところあったら、そっちに泊まろっかなーなんて。そういえば、恋次って昇格したのか?。」

「ん。ああ。そうだな。」

冬獅郎は、書類への手をとめないで答えた。

「何に昇格したんだ?。」

「三番隊隊長だ。」

「へー。恋次が隊長ねー。えっ。…。恋次が隊長だって――

――!?!。」

「ああ。そうだ。聞いてなかったのか?。」

「ま、あな。」

「阿散井は隊長だ。三番隊のな。」

「マジか。」

「マジだ。」

恋次が、あの恋次が隊長か。なんか嫌だな。

俺は思った。

「更木のところに泊まるっていうのはどうだ?。」

冬獅郎が、話を戻した。

「剣八のどこなんて、俺殺す気か?。」

「そうだな。というか、お前本当に此処に泊まるのか?。」

冬獅郎は、なんか嫌そうな顔をして言った。

なんか、何気に酷いな。

俺は思った。

「ああ。ほかに泊まるところがねえって言うてんだろ。」

「もういい。泊まるならとまれ。そのかわり、明日には、いなくなれ。」

「酷い言いようだな。じゃあ、お言葉に甘えて今日は泊まるぜ。」

「勝手にしてくれ。」

十番隊（後書き）

またまた、短い！

すいません。

初めて、本編で、冬獅郎登場です！

また、乱菊さんを叱ってます。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。などなどお待ちしています。

十番隊 ？（前書き）

夏梨と冬獅郎です。

第10話スタート！

十番隊？

己の為に 命を守り

仲間の為に 命を捨てる

「ん——。」

あたしは目を覚ました。

「此处は…。」

そうだ。昨日は冬獅郎の所に泊まったんだっけ。

にしても冬獅郎ってケチ。

部屋がないから、執務室で寝ろなんて。

しょうがないから、冬獅郎の部屋から布団を三式持ってきたけど。

今何時だろう。

あたしは時計を見た。

時間は…

「六時四十二分。」

ちよつと早いな。

あたしは隣を見た。

遊子はまだ寝てるし。一兄もまだ寝てる。

一兄が起きてないから瞬歩で違うところに連れて行ってもらえないし。

あたしが、瞬歩使えたらよかったのに。

その時。

ガン キン

裏庭で音がした。

何だろう。

あたしはそう思い駆け出した。

*

*

*

*

裏庭についた。

ガン

まだ、音はなっている。

あたしは、音が鳴つてるところに行った。

「と、冬獅郎…。」

そこには、冬獅郎が斬魄刀を持っている格好で立っていた。

「夏梨か。早いな。何してるんだ？」

冬獅郎はあたしに気付き話しかけてきた。

「それは、こっちのセリフ。冬獅郎こそ何してんの？」

「見りゃわかるだろ。剣の修業だ。」

「なんで、冬獅郎は隊長なのに修行してるの？」

「お前には関係ないだろ。」

「そうだけど…。でも冬獅郎今のままで十分強いじゃない！」

「…。そう、かもな。でも俺はまだまだ未熟だ。」

そうつ、冬獅郎の顔はどこかさみしげに見えた。

「言いたくないならいいよ。そこまで問い詰めないし。」

「…。そうか。じゃあ、お前はなんでここにいるんだ？」

「…。あれ、なにしようとしたんだっけ？」

なんであたし、此処にいるの？

「俺に聞くな。」

「そうだね。…。そうだ冬獅郎！あたしに瞬歩教えてくれない？」

「今度学校に行くんだろ。そん時教えてもらえ。」

「でもあたし、瞬歩してみたいんだよ。ね、この通り。」

あたしは頭を下げた。

「だめだ。第一俺は今修行中だ。瞬歩なんて学校に行つてからでも習うし、そんなに習いたいならお前の兄貴に教えてもらえ。」

冬獅郎はそう言つて、修行を再開した。

「え———」！

あたしは驚愕した。

わざわざあたしが頭を下げてるのに。

「五月蠅い。」

「なんだよケチ！」

「ケチで結構。」

「べ———」

あたしは、恨みを込めて言いそのまま執務室に向かった。

「なんだ、あいつ。大人になってもあんなことやってんのか。子供か？」

後ろで、冬獅郎がつぶやいてるのが聞こえた。

なんかムカついてきた。

「子供で悪かったですね！」

あたしは、叫んだ。

「なんだ、聞こえたのか。」

また冬獅郎がつぶやいてる。

あたしは、無視した。

*

*

*

*

なんだよ、冬獅郎の奴。

ほんとにケチ！

ガラ

あたしは力任せに、扉を開けた。

なんか、いい匂い。

あたしは、思った。

「あつ。夏梨ちゃん！どこ行ってたの？」

「ん。裏庭。」

遊子。起きたのか。

なんでかわからないけど、あたしの怒りは冷めて行った。

「一兄は？」

「お兄ちゃんならソファーだよ。」

遊子が答えた。

「お。おはよう夏梨。」

「おはよう。一兄。ところで今何時？」

あたしの怒りは、完全に冷めた。

なんでだろう？

まあいいや。

「今。今は八時四十三分だな。」

…。二時間も。あたしは、二時間もあそこにいたんだ。

時間がたつのは、早いな。

あたしは、思った。

「そつか。ところで、この匂い何？」

さつきから漂ってくるこの匂いが疑問になった。

「これ。」

遊子はそう言い机を指差した。

机なんてあったか？

よく見ると、布団はなくなっていた。

それで、机が出てきたってわけか。

乱菊さんの特等席が。

あたしはそう思いながら、机に近づいた。

机の上には、肉まんが乗っていた。

「此処って肉まんあったんだ。」

肉まんを見たときのあたしの第一声。

「なんだ、反応うすいな。」

一兄は、驚いたような声を上げた。

「これ、食べていいの？」

あたしは一兄に聞いた。

「さあな。わかんねえから冬獅郎を待つてるんだ。」

「そう。」

冬獅郎。聞いたらまた怒りが復活するかと思っただけど、あたしは全然怒っていなかった。

「それ、食っていいぞ。」

冬獅郎だ。

いつの間にか入ってきたのか。

冬獅郎は壁に寄りかかっていた。

「そうか。じゃあ、「いただきまーす！」」「」

あたし、遊子、一兄は、同時に肉まんにかぶりついた。

「そのかわり、それ食ったら、早く出てけ。」

「はい。」

一兄が代表して答えた。

やっぱしケチだ。

あたしは思った。

*

*

*

*

「「「ご馳走様——！」」」

「んじゃ、出てけ。」

カリカリ

「なんだよ冬獅郎。つめてーな。」

カリカリ

「五月蠅い。」

「へいへい。出ていきますよ。さようなら。乱菊さん仕事がんばってくださいね！」

乱菊さんは、まだ終わってない昨日の仕事をしていた。

「はい。」

乱菊さんは、すごい小さい声で答えた。

あたしにはもう、怒りがなかった。

なんでだろ。

ま、いいや。

「じゃ、冬獅郎。また今度な。」

「おう。」

そういい、一兄はあたしと遊子の手を取り瞬歩した。

引っ張ってもらう瞬歩って、周りの風景がすごい速さですぎていくから気持ち悪くなるんだよな。

あたしは、そう思い周りの風景が目に入らないように、目を閉じた。

十番隊 ？（後書き）

今回は夏梨目線です。

どうでしょうか？

夏梨目線って結構書きやすいです。

あんまり、一護の出番ありませんでしたね…。

次回も出番はないと思います。

次回は、自由行動になった、啓吾たちのお話です。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。などなどお待ちしています。

忙しい一週間　　？

己の為に　　　　　刃を　　振るうな

仲間の為に　　　　　刃を　　振るえ

時は少々遡る。

一護がみんなにこれからは自由時間だといいい遊子と夏梨を連れて消えた。

「行っちゃった。」

啓吾がつぶやいた。

「あーあ。これで僕らは朽木さんか石田君たちと一緒に行動しなきゃいけないんだね。」

水色が言った。

「なんだい。まるで僕たちとは行動したくないみたいな言い方。」

「だってそつだもん！」

啓吾が叫んだ。

「俺は、一護と行きたかったんだも——ん！」

みんなは、啓吾を無視した。

「じゃあ、井上と有沢は私と来い。瀨霊廷を案内してやる。ああ。井上は知ってるか。」

「うん！途中で十番隊によりたいけどいい？」

「いいが、なんでだ？」

「乱菊さんに会いたいから！」

「そうか。いいぞ！」

「ありがとう！朽木さん。」

「よろしくね。朽木さん、織姫。」

「まっかせといて〜！」

「こちらこそ。」

「茶渡君。僕は、ちょっと行きたいところあるから。あと宜しく。」

「む。」

「アッ！石田、この、どこに行くんだ——！」

「君には関係ない。浅野君。」

そういい、石田は飛廉脚で消えた。

「あいつ、瞬歩使えたのか。」

啓吾がつぶやいた。

「違う。あれは瞬歩でなく飛廉脚だ。ひれんきやく滅却師クインシーが使える。死神で言う、瞬歩だ。」

チャドが説明した。

「へー。そうなんだ。」

水色がつぶやいた。

「ところでさ、僕たち置いてきぼりだけど。」

また、水色が言った。

「あつ。ほんとだ。」

さつきまで、そこにいたルキアたちはいなくなって、一護もいない。そして、石田もいなくなった。

「これからどうする？」

「どうするって言われても…。俺たち知り合い、いないし。」

「俺はいるぞ。」

「…。よかった。チャドはどこに知り合いがいるんだ?」

啓吾が安堵したような声を漏らした。

「9番隊。」

「9番隊って遠いか?。」

「さあな、」

「さあなってなんなの? ねーなんなの?」

「とりあえず、行こう。」

そう言っただけで、啓吾、水色の三人は、出発したのであった。

*

*

*

*

「チャドまだー?」

「まだだ。」

「…。ついたぞ。」

「おっ。ここが、9番隊か。」

啓吾が言った。

「ここで、一週間過ごすの？」

水色がチャドに聞いた。

「ム。」

「「そう。」」

コンコン

「誰だ。」

顔に、「69」と書いてある人が出た。

「俺だ。」

チャドは、言葉数少なく答えた。

「…。チャドか！久しぶりだな！」

「久しぶり。」

「「……………」」

会話が終わってしまった。

「えっと…。なんでここにいるんだ？」

「ちょっと、止めてもらおうかと思ったからだ。」

「そ、そうか。ま、とりあえず中に入ってくれ。」

檜佐木は、チャドたちを中へ促した。

*

*

*

*

「で、だ。話をまとめると。」

「お前らは、黒崎に「死神にならないか」と言われ、死神になることを決意。ここまでは、あってるな。」

三人は無言でうなずいた。

「そして、そこに十三番隊副隊長朽木ルキアがきた。」

「ん。」

「それで、瀨霊廷に向かった。その時に、技術開発局の作った妙な馬のおかげで黒崎は死神に戻った。」

「はい。」

水色が答えた。

「そして今日の朝。瀨霊廷につき、そのまま一番隊へ。そこで総隊長に「これから一週間は、自由行動とする」といわれ、どこに泊まろうかと迷っていたとき。チャドが俺のことを思い出し、此処に來たってわけか。あってるか？」

「はい。」

またもや、水色が答えた。

「そうか。…。まあいい、泊まるならとまれ。その代り、いろいろ手伝ってもらっぜ！」

檜佐木が言った。

「「はい。」」

「む。」

「そうか、そうか。これから一週間よろしく頼むぜ。チャドに、えーと…。」

「水色です。で、こっちが啓吾。」

「よろしくな。水色、啓吾！」

「「はい。」」

こうして、この三人のドタバタな一週間が幕を開けた。

忙しい一週間 ? (後書き)

どうでしたか？

なんか短くありません？

啓吾、水色、チャドのお話です。

後、1〜2話は続きます。

ルキアたちも読んでいけばわかります。

誤文字の指摘、感想こんな話を書いてほしいというリクエスト。などなどお待ちします。

忙しい一週間？

限りがある 命には

時間には

「ほら、早くそこに運べ！」

「はい！」

「次はそれだ！」

「はい！」

「ほら、早く！みんな待ってるぞ！」

「は——い！」

ここは、9番隊隊舎内。

ただいま、半年に一回の大掃除中。

「いやー。助かったよ。ちょうど人手が足りなかったんだ。」

「いやいや。」

疲れ切った啓吾はとりあえず返事をした。

「じゃ、次はここ。」

と、9番隊の死神が指差した部屋を見て啓吾は驚愕した。

「此処何ですか？」

「ん。何の部屋だったかな？ 忘れたよ。でも一応掃除は全部屋やる
ってことだから。じゃ、頼んだよ。」

「…。」

この部屋の広さに驚愕した啓吾はもうしゃべれなかった。

「すう——。どうやって掃除すんだよ——！！」

啓吾の叫びはむなしくとても広い部屋に消えて行った。

「おい、チャド。その箱はそこに運んでくれ。」

「ム。」

ドスン

物凄い音がした。

いったいその箱には、何が入ってるんだろう？

近くで見た僕は、そう思った。

「サンキューな。チャド。今度はこっちの箱を運んでくれ。」

檜佐木さんが言った。

「ム。」

僕は自分の仕事を始めた。

仕事と言っても内容は、啓吾と同じ。

掃除する部屋の大きさが違うだけで。

サッ サッ サッ サッ

箒で掃いて。

塵取りにごみを入れ。

ごみ箱に捨てるだけ。

これが、啓吾と僕に割り当てられた掃除。

そしてチャドは、大きな荷物をごみ置き場まで運ぶなどの重労働。

本人は慣れた手つきでやっていく。

高校の時のバイトで工事現場をやっていたからなのかな？

僕は思った。

此処に来てもう四日。

来てからずっと掃除ばかりだ。

もういい加減飽きてくる。

まあ、泊めさせてもらってるから文句は言えない。

でも、あと何日掃除すればいいのだろうか。

もしかして、僕たちが真央霊術院に行くまでやるのではないかと思っ
てしまう。

…。もうすぐこの部屋の掃除が終わる。終わったら、啓吾の
手伝いに行こうかな。

「おい、水色。」

そんなことを考えていると、檜佐木さんが声をかけてきた。

「此処の掃除はもういいから、啓吾のどこにでも行って掃除手伝っ
てやれ。」

隊長命令では、逆らえない。

僕は思った。

なるべく僕は自分の気持ちを顔に出さないようにしているが、今回はさっき思ったことが顔に出てしまったようだ。

「隊長命令だからってことで行かなくていいぜ。行くのがめんどくさいなら行かなくてもいいけどな。」

「いえ。最初から行こうと思っておたので。行きますよ。」

僕はそう言い、啓吾がいる部屋の場所を聞いてから駆け出した。

「こら！隊舎の中で走るな！」

後ろで、檜佐木さんの声が聞こえた。

「すみません。」

僕は小声で謝った。

檜佐木修兵。

彼は、この50年で正解を取得し隊長に上り詰めた。

副隊長は、こひなみだいぎ子日並大樹

斬魄刀は炎熱系らしい。詳しい情報は知らない。

まあ。この隊の紹介は置いといて。

とにかく僕ら三人は、ずっと掃除をさせられてするという始末。

もう、飽きた。

掃除はあと何日で終わるのだろうか？

たった一週間だったのにすごく長く感じる。

啓吾が掃除してるという部屋についた。

何だこれは。

これが部屋を見たときの第一印象だ。

いくらなんでも広すぎだ。

「啓吾——！」

僕は啓吾を呼んでみた。

「はい。」

奥からくぐもった声が聞こえた。

「どこにいるの？手伝いに来たよ。」

僕は大きな声を出しながら前へ進んでいった。

「じじ、じじ。」

僕は啓吾を見つけた。

部屋の奥から掃除をしていたようだ。

「よ。僕は、あっちから掃除するからここ宜しく。」

「ああ。」

啓吾は、安堵した声を出した。

さすがにこの部屋を一人では、一日ではできなそうだ。

ふたりで分担すれば何とかなりそうだ。

3時間後。

部屋の掃除が終わり、僕たちは隊の食堂に行った。

その時、檜佐木さんに声をかけられた。

「よっ！掃除は終わったか？」

「はい。」

僕たちは、同時に答えた。

「そうか。今日で隊の大掃除は終わったからこれからは少し尸魂界についての基本的な知識をつける。勉強はうちの隊の図書室を使い。誰かに教えてもらいたいなら、俺に言え。」

「「はい。」」

また僕たちは同時に答えた。

そついい、僕たちは真央霊術院に向かって準備を始めた。

そして三日後。

あの日から、一週間。

僕たちは、一番隊舎に集まった。

忙しい一週間？（後書き）

これで、啓吾たちのお話は終わりです。

今度はまた一護たちの話に戻ります。

ちなみに目線は、水色です。

子曰並大樹は、オリキャラです。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエストなどなどお待ちします。

恋次の地獄？

仲間と 歩みを進める

けれど 一時だけ歩みを止める

後ろを振り返る

過去を受け入れ 前へ進め

「おい、ついたぞ。遊子、夏梨。」

俺は、瞬歩してる間、目をつぶってた2人に声をかけた。

「どい？」

「ここは、三番隊。」

「お兄ちゃん。なんで三番隊にきたの？」

「まあ、行けばわかるって。お前らは知らないけどな。」

そう言い、俺は隊舎の扉を開けた。

*

*

*

*

「お——い。れ——んじ——！」

「……。一兄何してんの？」

「俺の友達の恋次っていうやつを捜してんだ。」

「あっそう。」

俺の隣に、死神が通った。

「あの、すみません。ちょっといいですか？」

俺は、今通りかかった死神に話しかけた。

「はい、いいですけど……。」「

「テっ！吉良さんじゃないすか！」

「やっぱり！一護君！」

俺は驚いた。

「阿散井君に会いに来たのかい？ちょうど今執務室に朽木副隊長たちも来てるよ。」

「えっ。ルキアたちも来てんのか。」

「ああ。こっち、こっち。」

そう言い、吉良さんは俺たちを執務室に案内した。

*

*

*

*

「久しぶりだな！恋次！」

「黒崎君！まさかこんなところで会うなんてね〜！」

「一護！この人なんなの？なんかさっきから一護みたいなこと言ってるよ。」

「っ。それ、どういう意味だ？」

「そのまんまの意味ですよ！」

「ねえ、一兄。一兄が搜してる人って、こいつ？」

「こいついうな！そこ！」

「良いではないか恋次。ほんとにその通りなんだから。」

「何が言いてえんだ、てめえは！」

「ほっほっほ。愉快じゃの〜。」

「夜一さん！こんなとこにいたんすか。」

「お兄ちゃんこれ…。」

「アハハ…。」

俺たちがきたときは、もうなんか言葉で言えない様だった。

「お前ら、何してんだ？」

俺は、ルキアたちに聞いた。

「何って。たつきに恋次を紹介してるのだ。」

「そうか。あっそっだ、恋次ー。俺たちをここにしばらく泊めてくれないか？」

「はっ。なんでお前たちまで泊めなくちゃいけないんだ。」

「俺達までって、どういう意味だ？」

「こいつらも泊まるんだとよ。ここに。」

「良いじゃねえか。別に。ついでに俺達まで泊めてくれよ！」

コンコン

「どうぞー。」

「十番隊隊長。日番谷冬獅郎だ。」

「とうしろーっ！」

俺は叫んだ。

「日番谷隊長。またなんで隊長が直々に。」

「いいだろ、暇だから。」

「お前の隊、暇なのか！」

「正確に言えば、松本が書類をためたせいで仕事の効率が悪くなってるだけだ。」

「あっそう。」

「ていうか、なんでここに黒崎たちがいるんだ！」

「たまたまだよ、冬獅郎。」

「そうだ！日番谷隊長からも言っちゃってくださいよ。」

恋次がすぎるように、冬獅郎に言った。

「何をだ。」

「こいつら全員、此处に泊まろうとしてるんすよ！どうにかして追いつかせませんか？」

「朽木たちは、朽木邸に泊めればいいだろう。だが、黒崎たちはだめだな。」

「なんで、すか？」

「あいつらは昨日俺のところに泊まったんだ。しかもこいつら、追
い返しても勝手に人の部屋から布団を持っていくからいみねえんだ。」

「おい、一護。そうなのか？」

恋次が聞いてきた。

「違う違う。俺たちはちゃんと冬獅郎に許可を取ったぜ。な、冬獅
郎。」

俺は、冬獅郎がいた場所に顔を向けた。

「もういないぞ。一護。日番谷ならさっき瞬歩で逃げたわ。」

「ほんとですか！夜一さん！」

「ああ。」

「逃げやがったな。あいつ。」

俺はつぶやいた。

「まあ、良いではないか一護。にしてもそのアイデア良いな。」

「良いって何が？」

俺は夜一さんに聞いた。

「勝手に人の部屋から布団を取ってくるっていうやつじゃ。」

「何言ってるんすか。夜一さん。まあ、俺たちはそうするけどな。」

「おい、一護！勝手に俺の部屋から布団を取ってここに居座ろうってか！」

「ああ。」

「ああ。じゃねーよ！ここに居座るな！その辺で野宿してろ！」

「ワ——！この人ケチだね夏梨ちゃん。」

遊子が微妙に恋次に聞こえるか聞こえないかぐらいの声で恋次を侮辱し始めた。

「そうだな遊子。冬獅郎よりケチだ。」

夏梨が同意した。

「この人が隊長なんて嫌だね。」

「そうだな、遊子。こいつが隊長なんて嫌だぜ。」

俺も、同意した。

「あつ、一兄もそう思う？」

「もちろん。」

「おい、そこ。陰で人を侮辱するな！」

恋次が突っかかってきた。

「たった六人泊めるだけなのんな。」

「あと儂も。」

「夜一さんは、2番隊に泊まってください。」

「でも阿散井君ケチだね。」

「オッ井上もそう思うか。」

「うん。だって昨日は朽木邸に泊まったんだけど白哉さんは、快く良く泊めてくれたよ。」

「そうそう。でも驚いたな！。朽木さんが4大貴族なんて。」

たつきが言った。

「ルキアは、養子だよな。」

俺が言った。

「えっそうなの？」

「違う。兄様が結婚された方が私の姉上だから私は義理の妹であって養子ではない。」

「そ、そうだっけ。」

「そうだ一護。忘れるな。」

最初こそは、恋次が泊めてくれないからどーのこーの言ってたのに、なぜか話はルキアが貴族ということになっていた。

「おい、俺も混ぜろよ!」

恋次が言ってきた。

俺たちは言い返した。思いつきり嫌味を込めて。

「「「「「「「此処に泊めてくれなきゃ、話に混ぜませ——ん。」

「くっ。」

恋次がそうつぶや言ったのが聞こえた。

まあ、俺たちは無視して話を続けた。

「そついえば、夜一さんも4大貴族だよな。」

「そつじゃ。」

「「「えっ!夜一さんて、まさか人間?!」」」

「そつじゃ。…。言ってなかったかの?」

「うん。言っ
てなかつた。」

「そうか。わしは人間じゃ。」

...>< ><

衝撃の事実を知った三人は返事しかできなかった。

「……。あ——もう、分かったよ！！泊めりや——良いんだろ。泊めりや——！！。」

ついに、しびれを切らしたのか。恋次が叫んだ。

「おっ。おい、皆次からOK出たぞ！」

「ほんとか！一護。」

「おうよ！」

「じゃあ、お言葉に甘えて……」

「「「「「「「「お邪魔します」「」「」「」「」

「はいはい。」

うわ、阿散井君大変そう…。

吉良はそう思った。

こうして、恋次の地獄(?)の日々が始まった。

恋次の地獄？

？（後書き）

どうですか？

またまたシリーズものです。

ルキアたちは、朽木邸に泊まってたんです。

目線は一護です。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。などなどお待ちします。

恋次の地獄？ 吉良の巻（前書き）

最初に書くことのネタが尽きてしまったので、尸魂界の死神の名台詞を書きます。

恋次の地獄？ 吉良の巻

戦いには 命を守る戦いと 誇りを守り戦いがある。

by 浮竹

「お——い恋次。飯まだか？」

「そんなの食堂に行って食べ。」

「食堂はどこにあるんだ？」

「その角を左に曲がって、突き当りに出たら右に曲がる。んで次の角を左に曲がって、そうしてら……。」

「言葉で言われてもわかんないよ。恋次。」

「夏梨ちゃんの言うとおり！案内してよ恋次。」

「そうじゃ。案内せんか。恋次。」

「夜一さんは黙っててください。ていうかそこ！何気に俺を呼び捨てで呼ぶな。」

「良いじゃん。別に。ねえ遊子。」

「うん。」

「阿散井く——ん。私もおなか減った。」

「あつ、あたしもあたしも！」

「だから食堂に行つて食えつての。」

「だからその食堂がどこにあるのかが、わからないのだ。」

「自慢げに言つな、ルキア。」

「おい、恋次。この書類全部お前が書くのか？」

「ああ、そうだけど。」

「意外とすごいな。」

「意外とつてなんだ。意外とつて。」

「ま、気にするな。」

「……。オツ良い所に来たじゃねえか、吉良。」

「ハあ？」

たつた今執務室に入つた僕は驚いた。

何せ此処はもう黒崎君たちに占領されてたからだ。

「いや——。吉良ちょっと。」

阿散井君はそう言い、手招きした。

「ちょっとこいつらを食堂に連れて行ってくれねえか？さっきから、腹減ったってうるさいんだよ。」

「ん、うん。別にいいけど。」

なるほど。さっきの会話はこういう意味だったのか。

まあ、会話の内容からしてわかるけど。

取りあえず、だれが何を言ってるのかを整理しよう。

上から、黒崎君↓ 阿散井君↓ 黒崎君↓ 阿散井君↓ 夏梨君↓
遊子君↓ 人間姿に戻ってる夜一さん↓ 阿散井君↓ 夏梨君↓
遊子君↓ 井上君↓ たつき君↓ 阿散井君↓ 朽木君↓ 阿散
井君↓ 黒崎君↓ 阿散井君↓ 黒崎君↓ 阿散井君↓ 黒崎君↓
阿散井君という順番。

うわっ。阿散井君出番多！

そんなことを考えていると、阿散井君が声をかけてきた。

「そうか！じゃあ、早速だけど頼むわ。」

「わ、わかった。」

阿散井君……。君、今の自分の表情見てごらん。

あんまり喜んでる阿散井君を見て僕は思った。

*

*

*

*

「はい。着いたよ食堂に。食べるものは自分で選んでね。今日のメニューは、かつ丼定食と、サバの味噌煮定食の二つだよ。」

そう僕が言うのが早い。

七人は、早速定食を取りに行った。

ていうか、夜一さん……。ここで瞬歩使わないでください！

あとで注意しとかないと……。

ここで、あの七人は戻ってきた。

いくらなんでも早すぎなんじゃ……。

みんなの定食は……。

黒崎君↓かつ丼。夏梨君↓かつ丼。遊子君↓サバの味噌煮。

朽木君↓サバの味噌煮。井上君↓かつ丼。たつき君↓かつ丼。夜一さん↓サバの味噌に。

なんかみんな予想通り。

夜一さんは、猫だから魚にしたのか？

「サンキュー。吉良さん。」

黒崎君が、代表としてお礼を言った。

「いやいや。それじゃ、僕はこれで。」

「おう。ありがとうな、ほんと。恋次とは大違いだな。」

「アハハ…。それじゃ。」

「おう。」

黒崎君。何気にうちの隊長を侮辱してるような気が…。

そう思いながら、僕は食堂から出て行った。

*

*

*

*

僕は執務室に戻っていつも通り仕事をした。

隊長の阿散井君も仕事をしている。

嵐のような七人は今食堂にいたので執務室はとっても静かだ。

「静かだね。阿散井君。」

「そうだな。」

僕はつぶやいた。

阿散井君は書類を見直しながら言った。

昨日、日番谷隊長にもらったものだ。

「よし。できた。」

阿散井君が言った。

どうやら書類はできたようだ。

「おい、吉良。この書類。一番隊だよな。」

「うん。そうだよ。」

「よし。ちょっと新人呼んでくる。」

そう言い、阿散井君は出ていった。

しばらくして、一人の死神を連れてきた。

茶色い髪の毛。細身の体。

名前は確か、かんはるあずさ柑春梓沙

彼女は、細身の割に戦闘においては、新人の中では抜けている。

新人、20人の中でゆうつ始解を会得している。

彼女はさすがに隊長相手なのでわたわたりしていた。

「これ、6番隊に届けてくれ。」

「はい。」

「じゃ。」

会話 短い！

そんなことを思ってる僕をよそに、柑春君は書類を届けに6番隊に行った。

「じゃ、吉良。俺はこの書類を一番隊に届けてくるわ。」

「行つてらっしゃーい。」

ガラ

ドアを閉める音が聞こえた。

そのあとに阿散井君のぎよつとした声が聞こえた。

ガラ

ドアが開く音がした。

阿散井君はもう帰ってきたのか？

僕はそう思い書類から顔を上げた。

えっ。

黒崎君…。

そういえばいたんだっけ。

「おっす。吉良さん。ところで質問なんだけど…。」

この一言から、黒崎君たちのおしゃべりが始まった。

これからは、鍵かつこの隣に誰が言ったのかを乗せてもらう。

「トイレどこだっけ？」黒崎君

「馬鹿。トイレはすぐそこですよ。昨日教えてもらったのにもう忘れたの？」 たつき君

「ああ。忘れた。」 黒崎君

「わお。驚いた。」 たつき君

「一兄、トイレに行きたいんじゃないの？」 夏梨君

「あ、そうだった。」 黒崎君

「早く行ってこんか。」 朽木君

ガラ

扉を開ける音がして

ガラ

扉を閉める音がした。

「にしても。一護ってホント忘れっぽいよね。」 たつき君

「うんうん。一兄はあたしたちが生きてた時からそうだったよ。ねえ、遊子。」 夏梨君

「ほんとほんと。これ買ってきて、って言ったら絶対忘れてくるもん。まあちゃんと買ってきたときもあったけどね。」 遊子君

「ふーん。あとさ、一護って人の名前とか覚えるの苦手だよね。」
たつき君

「あつそうそう。石田君の名前とか全然覚えてなかったよ。」 井上君

「そうなのか。それは知らなかった。」 朽木君

「そうなんだよ朽木さん。あれ、黒崎君、朽木さんの名前はすぐ覚えたのかな？」 井上君

「私の名前はすぐに覚えたな。名前だけな。」 朽木君

「名前だけってどういう意味？ルキ姉。」 夏梨君

「尸魂界とか死神とか虚とかはまったく覚えていなかった。」 朽木君

「そうなんだ。」 夏梨君

このおしゃべりいつまで続くんだろう。

僕は、そう思いながら書類を書いていた。

約束の日まで残り五日。

恋次の地獄？ 吉良の巻（後書き）

今回は、吉良目線で書いてみました。

どうでしたか？

吉良ってどんな感じかわからないんでキャラが崩壊してる気がします。（汗）

柑春梓沙は、オリキャラです。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエストなどなどお待ちします。

恋次の地獄？ 三番隊とさようなら

… 貴様の問題だ 深い 深い問題だ 私はそれを訊く術を持つため。

貴様の心に 泥をつけず その深きにまで踏み込んで

それを訊く上手い術を私は持たぬ。

だから待つ。

いつか貴様が話したくなった時 話してもいいと思った時に…

話してくれ

それまで待つよ

私は

by ルキア
グランドフィッシャー編より

俺たちが三番隊舎に来てからもう、三日たった。

〓（イコール）約束の日まであと二日。

最初の二日は、初日見たく大騒ぎだったけど三番隊の隊舎にも慣れて、なんとなく

「そろそろここ出ようかな。」

とか思っていたらルキアが

「霊術院に向けて勉強したらどうだ。」

と言われたので俺たちは一昨日から真央霊術院に向かって三番隊舎で、勉強を始めた。

「おい、ルキア——これどういう意味だ？」

俺は聞いた。

「どういつってそのままの意味だ。」

「これ俺たちがここに来た時のものだよな。なんか事実と違うねえか？」

「何が違うのだ。」

「ここ。」

そっつい、俺は文章に指を立てた。

「えーと。『藍染惣右介、市丸ギン、東仙要の三人は罪人朽木ルキ

アの体内にあつた「崩玉」を手にし「虚圏」へ逃走。その後、朽木ルキアの罪は解かれその際、侵入した旅禍^{リョウカ}「黒崎一護」を、死神代行として認めた。『…。どこが間違つておるのだ。』

「違う違う。井上が虚圏^{ウエコムンド}に連れ去られたとき。」

「はあ？『朽木ルキア救出の際、黒崎一護死神代行とともに侵入した旅禍、井上織姫が藍染の手先「破面」^{フランカル}とともに「虚圏」^{ウエコムンド}に。』…。どこが間違つてるか？」

「こんなことだったか？」

「井上に聞けばよからう。」

「さっきからそうしようとしてんだけどよ。井上はどこにいるんだ？」

「さあな。」

「まあ、いいや。で、なんで俺は歴史の勉強してるんだ。」

「お前の尸魂界の知識があまりに乏しいからだ。」

「それは、俺だけじゃねえだろう。」

「まあな。だが、井上も歴史の勉強をして、たつき、遊子、夏梨は霊圧上昇・解放の訓練をしてるのだ。」

「…。俺は鬼道の練習をすればいいんじゃないか？」

「よく気付いたな。これから鬼道の練習をするのだ。」

「はあ？今から！？」

「今からだ。その藍染の戦い以降尸魂界には、大きな事件はなかったからな。」

「そうか。」

「では、外に出ろ。」

*

*

*

*

「おい、吉良。なんか庭が騒がしくねえか。」

「そうだね。なんか、物が壊れている音が聞こえるような。」

「ちょっと見てくるわ。」

「行ってらっしゃい。」

*

*

*

*

「こうだ一護。破道の一衝^{シュウ}。」

「そっかい、ルキアは指先を木に向けて言った。」

その直後、指先から、弱い光線が出た。

「さっき詠唱は教えただろう。」

「そうだけだよ。」

「ならばやらないか。」

ルキアにそういわれ、俺はさっき教わった詠唱を唱え言った。

「破道の一　衝！」

結果は失敗。

弱い光線どころか、何も出なかった。

「何故出来ぬのだお前は！」

「そんなこと俺に言われてもしらねーよ！」

「もう一度言ってみろ！恋次でさえできたのだぞ！」

「嘘だ——！あの恋次にできるわけねーだろ！」

「それが出来ちゃうんだな！。これが。」

俺とルキアが言い争っているとき、突然後ろで声がした。

声の主は…恋次だ。

「わっ！脅かすなよ恋次！」

「別に脅かしてなんかないぜ。それより一護。お前破道の一もできねえのか！」

「で、できるさ！今からやってやるから、黙ってみてろ。あっそうだ、ルキア。」

「なんだ。」

「詠唱破棄でもいいか？」

「できるならな。」

「よし。じゃ。すう——。」

俺は呼吸を整えた。

詠唱破棄にしたのは、そっちのほうが出来そうだと思ったからだ。

つまり勘。

「破道の一 衝！」

俺は言った。

そしたら、ルキアの光線よりもはるかにでかい光線が指先から出た。

「どうだ、恋次。ルキア。」

「…。いや、まさか詠唱破棄で、できるとわな。」

俺は、恋次に聞いたのになぜかルキアが先に答えた。

「まったくだぜ。しかもルキアよりでかいな。」

「…。」

ルキアは無表情だ。

内心は、すんごい悔しんだろうな。

俺は思った。

「じゃあっ!!」

俺は、歓喜の声を上げた。

この調子で、破道は詠唱破棄で三十番台までいった。

「よし、次は赤火砲だ。」

「どうやるんだ?」

俺は聞いた。

「撃つ対象物に向かい、唱えるのだ。波道の三十一 赤火砲!」

ルキアはそう言い、木に向かって火魂を打った。

「ここからは、恋次も練習だ。」

「なんでだ！」

俺は驚いた声を上げた。

「あれから、五十年もたってるのに出来ぬからだ。」

ルキアが淡々と答えた。

「あれから五十年もたって、しかも隊長なのにできねーのか。」

俺は言った。

「う、うるせー！悪かったなでなくて。」

「とりあえず、やってみろ。まずは、恋次から。お前は詠唱ありで。」

「おう！『君臨者よ 血肉の仮面・万像・羽ばたき・ヒトの名を冠す者よ 焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ』破道の三十一 赤火砲！」

そう言い、恋次の手からよくわからない赤い物体が出てきた。

「失敗だな。」

ルキアが言った。

「う、うるせ——！」

「じゃあ、次一護。」

ルキアは、赤火砲を連続して撃ってる恋次をよそに俺に、言った。

「おう。波道の三十一　赤火砲！」

俺の手のひらから、ルキアよりでかい赤い火魂が出てきた。

「俺は成功だ！がんばれ恋次。そういえばお前隊長の仕事はいいのか？」

「あ——！！！！！！忘れてた！」

「おい、忘れんなよ……。」

俺は、叫んでる恋次を呆れ顔で見た。

「じゃ、俺は戻る！！！！」

「おう。じゃあ、ルキア続き。」

「うむ。」

「お——い、いちに——い——！！」

「おにいちゃ——ん——！！」

「一護——！！」

「黒崎く——ん！」

急に、声が聞こえた。

そこに、遊子、夏梨。たつき、井上が現れた。

「何やってるのお兄ちゃん？」

「鬼道の練習だぜ。遊子。」

「ふ——ん。」

夏梨が答えた。

「お前らも練習すつか？」

「「うん！！！！」」

遊子と夏梨が同時に言った。

「お前らは？」

「えっ。私?!」

「ああ、そつだ。」

「やっていいのかな？たつきちゃん。」

「良いんじゃないの？」

「じゃあ、私たちもやる！」

「良いよなルキア。」

俺は一応ルキアに確認を取った。

なんだか、全部おれが決めてるみたいだと思ったからだ。

「ああ、もちろん。」

ルキアは答えた。

「サンキュウ——♪。」

俺は答えた。

そうしてみんなで、鬼道の練習を始めた。

井上は、うまくできた。

予想通り。

意外と遊子、夏梨、たつきも鬼道がうまく出来ていた。

そして今日は、みんな破道、五十番台までやり一日が終わった。

そして次の日も、鬼道の練習、勉強。

そして、約束の日がやってきた。

恋次の地獄？ ？ 三番隊とさようなら（後書き）

どうでしたか？

ついに次回から、真央霊術院篇に突入です。

この話どうしたら終わるんだろう…。

いや、ちゃんとあらすじっていつかどういつぶうに話を持っていきたいかは決めてるんです。

なんか長引きそうです…。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。などなどお待ちしてます。

立場の整理（オリキャラ多数）（前書き）

すいません。

次回から新章とか言っていました。その前に、皆の立場の整理をします。

オリキャラ多数です。

本編には、いつか出てくると思います。

立場の整理（オリキャラ多数）

一番隊

総隊長 ↓ 山本 元柳斎

副隊長 ↓ 雀部 長次郎

二番隊

隊長 ↓ 碎蜂

副隊長 ↓ 大前田 希千代

三番隊

隊長 ↓ 阿散井 恋次

副隊長 ↓ 吉良 イズル

新人

柑春 かんはる
梓沙 あずさ

四番隊

隊長 ↓ 卯ノ花 烈

副隊長 ↓ 虎徹 勇音

第三席

伊江村 八十千和

第四席

山田 花太郎

五番隊

隊長 ↓ 新洋^{しんよう} 芽衣^{めい}

副隊長 ↓ 雛森 桃

六番隊

隊長 ↓ 朽木 白哉

副隊長 ↓ 神谷^{かんたに} 鈴^{れい}

七番隊

隊長 ↓ 狛村 左陣

副隊長 ↓ 射場 鉄左衛門

八番隊

隊長 ↓京楽 春水

副隊長 ↓伊勢 七緒

九番隊

隊長 ↓檜佐木 修兵

副隊長 ↓子日並 こひなみ 大樹 だいき

十番隊

隊長 ↓日番谷 冬獅郎

副隊長 ↓松本 乱菊

十一番隊

隊長 ↓更木 剣八

副隊長 ↓草鹿 やちる

第三席

斑目 一角

第五席

綾瀨川 弓親

十二番隊

隊長 ↓ 涅 マユリ

副隊長 ↓ 涅 ネム

十三番隊

隊長 ↓ 浮竹 十四郎

副隊長 ↓ 朽木 ルキア

第三席

小椿 仙太郎

虎徹 清音

三番隊

柑春 かんはる
梓沙 あずさ

五番隊

新洋 しんよう
芽衣 めい

六番隊

神谷 鈴かんだに れい

九番隊

子日並 大樹こひなみ だいき

は、オリキャラです。

立場の整理（オリキャラ多数）（後書き）

これが、今の『護廷十三隊』です。

今回は、本編と関係ないので次話できれば、今日中に更新したい
と思います。

真央霊術院に向かい（前書き）

遂に新章突入です。

真央霊術院編です。

では、楽しんでください！

真央霊術院に向かい

兄貴つてのが どうして一番最初に生まれてくるか知ってるか…？

後から生まれてくる 弟や妹を守るためだ！！

兄貴が妹に向かって、殺してやる、なんて…

死んでも言っんじゃねエよ！！

by・一護 井上の兄貴が虚になった時より

あの日から、一週間たった。

俺を含めて、遊子、夏梨、井上、たつき、ルキアは今日の朝に三番隊舎を出た。

そして昼ごろに一番隊舎についた。

しばらく待つと、チャド、啓吾、水色がきた。

今まで九番隊にいたようだ。

そして、10分くらい待つと総隊長とともに石田が出てきた。

「お前どうして、そこから出てきたんだよ!」

俺は驚いて聞いた。

「君たちより早く着すぎたせいで僕は一番隊にいたんだ。」

「そ、そうか。なんかわりいな。」

そして全員そろった。

「これから、おぬしたちは『真央霊術院』の生徒じゃ。死神、尸魂界などの勉強に励むこと。」

総隊長が口を開いた。

「「「「「「「はい! (ム)」「」「」「」「」

俺たちは返事をした。

「では、朽木副隊長。真央霊術院への案内。頼んだぞ。」

「はい。」

「では、散!」

総隊長がそう言い、ルキアが瞬歩した。

俺たちは、ルキアに瞬歩でついて行った。

真央霊術院に向かい（後書き）

短いです！

本当にすいません！

次話はすぐに投稿します！

明日は休みなので、いつぱい更新するかもです。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。などなどお待ちします。

寮（前書き）

今回は、長く書きます！！

では、第18話スタート！

寮

——同じなんだよ　死んだやつも　残されたやつも

——どっちも同じだけ淋しいんだ…！

ba・一護　井上の兄貴が虚になった時より

「よつと。」

あたしたちは、ついに霊術院についた。

やっと、皆を護れる力が手に入る。

一兄も。

遊子も。

そして、この世のすべての人を護れる力が…。

あたしは期待に満ちた眼で、学校を見た。

絶対に、死神になってやる。

あたしは心の中で誓った。

「朽木ルキアだ。」

ルキ姉が、扉に向かっていった。

よくよく考えると、あたしたちの編入って時期がずれてるんだよね。

確か今日は、2062年の七月初め。

ちゃんとした、日付も分からなくなってきた。

ま、いいや。

そんなことを考えていると、扉があきルキ姉が言った。

「お前たちの編入は、かなり特別だ。これからお前たちがこれから寝起きする寮、そしてお前たちがこれから通う学校、クラスについて説明する。貴様らが通うのは明後日からだ。明日は、制服や学校の校則などを説明する。分かったか？」

「おう！」

一兄が答えた。

「よし。とりあえずついてこい。最初は寮からだ。」

そしてあたしたちは、霊術院へ足を踏み入れた。

*

*

*

*

「ここだ。」

ルキ姉が急に止まった。

「これが…。」

あたしはつぶやいた。

此処が、これからあたしたちが住む寮か…。

見た目は、焦げ茶色の細長い隊舎。

寮は二つあって、一つ一つの寮の間は200メートルぐらい離れていて霊術院までの距離は約1キロメートル。瞬歩、3〜4回ぐらいでつくかな？

一兄だったら、2回も有るか、無いか。

これで、寮の見た目の説明は終わり。

ルキ姉が話し出した。

「ここは、見ての通り寮だ。右が女子寮、左が男子寮だ。そして、寮にもその寮の花、つまり、『寮花^{りょうか}』がある。これは、必ず覚えておけ。」

「分かった。」

あたしが答えた。

「女子寮は、ラベンダー。花言葉は許しあう心。男子寮は、スノーフレーク。花言葉は、純潔、けがれ無き心だ。覚えたか？」

「ちよい待てルキア。それって覚えなきゃいけないのか？」

一兄が聞いた。

「さっき言っただろう。」

「そうだな、大丈夫だと思うぜ。多分…。」

おいおい一兄。このぐらいちゃんと覚えろよ。

これから覚えなきゃいけないことなんていろいろあるのに。

「そしてまず女子寮から、紹介する。ちなみに女子寮には女子のみ。男子寮には男子しか入れないことになってる。勝手に入ったら、…いや、この先は言わないでおこう。」

「…………ちよっ、ちよっと待った！！！！」「…………」

あたし、一兄、遊子、たつき姉、織姫ちゃん、啓吾、石田が突っ込んだ。

「なんだよ、ルキア。そこで切るなよ！先が気になるじゃねえか！」

「いや、これは絶対に明日分かる。その位我慢しろ。」

いやいや、我慢しろ、ってルキ姉。一兄はそんなの無理だって知ってるでしょ。

「今教えるよ!」

ほら来た。一兄の反逆。そういうところが子供なんだよ。

「断る。今教えたってお前に理解できまい。」

ルキ姉。…。そんなにすごいお仕置きなのか？

「そんなにすごい罰なのか？」

わっ。一兄があたしと同じこと言ってる。

「そつだ。」

ルキ姉無表情。ほんとかどうかわかんないじゃん。

「もついい。」

一兄はあきらめたみたい。

「とりあえず、女子寮だ。遊子、夏梨、井上、たつき。ついてこい。」

そう言い、あたしたちはこれから住む女子寮に向かった。

*

*

*

*

寮の中は、案外綺麗だった。

一部屋、4人で2段ベッドが2つある。

あたしたちの部屋は、玄関から最初の角を左、その次の角を右に曲がったところにあった。

部屋には、それぞれ名前がありあたしたちが住む部屋は「桔梗の間」^{ききょう}。

ルキ姉から聞いたんだけど、桔梗は、^{ききょう}「気品」っていう意味があるらしい。

遊子とか織姫ちゃんならわかるけど、あたしと、たつきちゃんは気品のかけらなんてこれっぽっちもないと思んだけど…。

あつ、たつきちゃんに失礼か…。

それで、食堂はあたしたちの部屋から廊下を出て左に曲がりそのまま、まっすぐ進んだところ。

食堂の中は、まるでどこかのカフェのような匂いを漂わしていながら、なんとなく和風な感じもする。

あたしの口では言えないような感じた。

取りあえず一言でいうと、とってもおしゃれだ。

そしてお風呂は、部屋に一つとあたしたちの部屋から左に曲がり食堂を通り過ぎ次の角を左のところにある。

銭湯並みの広さ、でもお風呂のデザインはなんとなく古い。

江戸時代の五右衛門風呂みたいだ。

…。このぐらいで、女子寮の説明は終わった。

あたしたちは、外に出た。

そこには、一兄たちが待っていた。

隣には、なぜか恋次がいた。

「おう、ルキア。そっちは終わったか？」

「うむ。後は頼んだぞ恋次。」

パチン

ふたりは、ハイタッチをした。

そういえば、女子寮には女子しか、男子寮には男子しかはいれなかったんだっけ。

そして、一兄たちは、男子寮に入っていた。

*

*

*

*

一兄たちが出てきた。

あたしは一兄に男子寮はどんなかを聞いた。

「ああ、そうだな。まず俺たちの部屋が玄関を上がって最初の角を右そして次の角を左に曲がったところにある。で、部屋には一つ一つ名前がついてあって俺たちの部屋の名前は『朝顔の間』。確か、花言葉は……。あー、そうだ。花言葉は、固い約束か、結束みたいな。んで、食堂があって、俺たちの部屋を出て突き当りを右、で、玄関と反対方向にまっすぐ進んで次の角を左に曲がったところにある。で、食堂はカフェみたいな感じだ。で、最後に風呂。部屋に一つと、食堂を出てというか、玄関からまっすぐ進んで突き当りを左に曲がったところにあつて広さは銭湯で見た目は五右衛門風呂か。まあ、そんなとこだな男子寮は。そっちはどうだったんだ？」

あたしが一兄に聞いてるのに逆に聞かれた。

「ン」。女子寮もそんな感じ。一応いうけどあたしたちの部屋の名前は「桔梗の間」。花言葉は気品だつてさ。あたしからすごいかけ離れてると思わない？」

「そうだな。お前らの部屋は一部屋何人だ？」

「んと、よ」「4人だよ、お兄ちゃん!!!」

突然遊子が割り込んできた。

遊子のことだから、さっきから一兄と話してるあたしを見つけて自

分も話したいと思ったんだろうな。

遊子はまだまだお兄ちゃんっ子か。

「そうか。俺たちは一部屋五人だ。」

「ふーん。」

「お兄ちゃん！お兄ちゃんはどうだったの？」

遊子が一兄に聞いた。

一兄はさっきあたしにした説明と同じことを言った。

一兄も大変だね！。

あたしはそう思いながら、今度は霊術院の本校舎に足を踏み入れた。

寮（後書き）

どうでしたか？

夏梨目線で書きました。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエストなどなどお待ちします。

クラス（前書き）

クラス発表です。

19話スタート！

クラス

こうして生まれてきたんだよ！

自由に生きて 自由に死ぬ権利ぐらいあるハズじゃねえか！！

虫だろーが 人間だろーが…

オレたちだって… 同じだ…

だからオレは殺さねえ…

何も… 殺さえんだ…！

by コン 改造魂魄編より

「よし、これからお前たちが明後日から通う学校を案内する。」

「とつ。その前にお前らのクラスを発表する。」

「まず、一護、石田、井上、チャド。」

「お前らは、六年生に編入だ。クラスは、六年一組に、一護と井上、二組に、石田、チャドだ。」

「次に、遊子、夏梨、たつき、啓吾、水色。」

「遊子・夏梨・たつき・啓吾・水色は四年に編入だ。クラスは、遊子・夏梨・たつきが一组。」

「啓吾・水色は二組だ。」

「分かったか？」

ルキアと恋次が交互に言った。

俺は、井上と同じクラスか。

というかいきなり六年か。

「因みに言つと一組が、特進クラスだ。」

「ちょっと待った。それじゃあ、僕は黒崎より劣ってるというのか！」

「…。そういうことになるな。」

ルキアは、石田に淡々と答えた。

俺が石田より上なんてなかなかいい気分だ。

「何故だ！黒崎は霊圧コントロールが下手だろ！」

「一護は、鬼道ができるようになったぞ。」

「はあ！？あの黒崎に鬼道ができる！？」

「おい、あのってどういう意味だ、石田！」

「お前は、鬼道が出来なかったはずだといってるんだ。」

「俺は言っとくが、鬼道が使えるようになったぞ！見せてやろうか
！！」

「ちょ、やめなよ一護。あんたの食らったらしばらくは立ち上がれないよ。」

「そうだよ、一兄。」

「やめてよ、お兄ちゃん。」

「黒崎君の鬼道は朽木さんよりすごいから、やめてよ。」

「そうだ一護。お前が本気を出したらいくら私でも止められん！！」

俺が、石田に向かって鬼道を使おうとしたら、たつき・夏梨・遊子・井上・ルキアの順で止めてきた。

石田は、意味がよくわかってないようだ。

俺がルキアよりすごいができる。

このことが石田の思考を乱したようだ。

「いや、皆止めるな。黒崎。そんなにすごいなら見せてくれ。」

「良いぜ！」

石田なんだよ。開き直ったのか？

俺は、石田に向かって何をしようか考えた。

「お——い、石田。何をやってほしい？」

「そんなこと聞くのか……。そうだな……。じゃあ、朽木さんがよく使ってる、赤火砲とか、蒼火墜とかか。」

「分かった。」

どっちにしようかな。

じゃあ、蒼火墜で。

「行くぜ石田！破道の三十三 蒼火墜！」

そう言い、俺の手のひらからはバスケットボール並みの大きな蒼い爆火が出た。

「わあ！」

石田はそう言い、飛廉脚で俺の隣に移動した。

「どうだ！」

俺は、石田に言った。

「まさかな…。」

なんだよ、こいつ。人を褒めるってことを知らないのか？

まあこいつに褒められてもあんまし嬉くねえが。

「もういいか？」

恋次が聞いた。

「ああ。」

俺が答えた。

「それじゃあ、これから校舎を案内する。皆しっかりついてこいよ！」

恋次がそう言い校舎に入っていった。

俺たちは後について行った。

*

*

*

*

「ここは、四年の校舎だ。遊子・夏梨・たつき・啓吾・水色はよく覚えておけ。」

ルキアが言った。

「このクラスが二組。隣が二組だ。一組の責任者は、」

「責任者って何？」

遊子が聞いた。

「責任者とは、そのクラスの先生のことだ。課目によって担任は変わるがおもに授業をするのが責任者という。」

「ふーん。」

「で、その責任者って誰？」

夏梨が聞いた。

「このクラスの責任者は、淫大^{いんだい} 任海^{とうみ}だ。明後日会うだろう。聞きたいことはその時、詳しく聞け。」

ルキアは質問しようと口を開き始めたたつきを遮った。

「次に二組だ。ここの責任者は梨路^{なしろ} 紅衣^{くい}だ。分かったか？」

「うん。」

啓吾と水色が答えた。

「次は、六年生だ。」

ルキアはそう言い、階段を上って行った。

*

*

*

*

「ここが、六年生がいる校舎だ。」

「ふーん。」

案外普通なんだな。

俺はそう思いながらルキアの後をついて行った。

ドン

俺は誰かにぶつかった。

「っ！いつてーな！」

そう言い、前を見た。

俺とぶつかったのは、全体的に小柄な男だった。

此処にいるってことは、六年生か？

「いった——！あ、す、すいません！」

「良いつて。前を見てなかった俺にも非はあるし。」

「いや、すいません！」

「だからいって。」

俺はあきれながら言った。

「あ、あの。」

「なんだ？」

急に、小柄な奴が声をかけてきた。

「さっき、学校の前でとてつもない蒼火墜を撃つてた人ですよね。」

こいつは、遠慮がちに聞いてきた。

学校の前でつてことは石田に向かって撃つたやつだな。

「ああ。そうだぜ。」

俺は答えた。

「やっぱり！！あの、僕、津ノ井^{つのい} 遼^{りょう}といいます。あなたは？」

「ん。俺か。俺は、黒崎一護だ。宜しくな。」

ピキン

時間が固まったような音がした。

どうやら、ほかの六年生も教室の窓から俺たちのことを見ているみたいだ。

遼も、その六年生もみんな固まった。

「……。皆どうしたんだ？」

「言っただろう。ここではお前たちは有名人だと。」

……。そういえば。

「ええええええええ

！！！」

遼は、鼓膜が破れるほどの声を出した。

「き、君。いや、黒崎さん。あなたは、あの黒崎さん？」

「あ、ああ。そう、だけど。」

あのって言われてもわかんないけど、ルキアを見たらとりあえずそういつとけみたいな視線が返ってきたのでそういった。

「……………」

遼は、口をパクパクさせていた。

酸素を吸おうとしてるのか。

それとも、驚きすぎて声が出ないのか。

その時窓から見ていた、六年生がつぶやいた。

「本物だ…。オレンジ色の髪。身の丈ほどの斬魄刀。そして何より、後ろにいる死神のメンツ。三番隊隊長、阿散井恋次。当時は、六番隊副隊長。そして、十三番隊副隊長朽木ルキア。黒崎一護に、死神の力を明け渡した張本人。当時は十三番隊の石官にもなっていない。」

そいつは、教科書をぺらぺらめくりながら言った。

「本物…。」

遼がつぶやいた。

「えっと、い、いろいろ聞きたいんですけど…。」

「良いけど。」

俺は、六年生の一人に聞かれ、答えた。

その瞬間、此処にいる皆がいつきに俺に質問した。

「本当に、あの藍染を倒したんですか!」

「一度、死神の力を失ったというのは本当ですか?」

「なんでここにいらっしゃるんですか?」

「何歳なんですか?」

「斬魄刀は斬月というんですか?」

「あなたのお父さんが死神だというのは本当ですか？」

「朽木副隊長・阿散井隊長は黒崎一護とどういう関係ですか？」

「そこにいるのは、妹さんですか？」

「そこにいるのは、井上さんと茶渡さんと滅却師クインシーの石田さんですか？」

俺は耳を抑えた。すごい声だ。

まさか質問の矛先が遊子たちや、石田達に向くとは思わなかった。

「すう——。スト——ップ——！！！」

恋次が叫んだ。

そりゃそうだろうな。

俺は思った。

「質問は、順番にだ。」

おいおい、お前。

何言ってるんだ。

というか、俺たちのクラス紹介はどうしたんだよ。

俺は思った。

クラス（後書き）

何か微妙ですね。

今回は、一護目線です。

やっと、遊子たちの教室が紹介です。

クラスメイト等は、もう少し先になりそうです。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。などなどお待ちします。

クラス？（前書き）

今回は、六年生です。

第20話スタート！

クラス？

そうだ、こうしねえかチャド。

オマエは今まで通り自分の為に誰かを殴ったりしなくていい。

そのかわり、俺のために殴ってくれ。

俺はオマエのために殴ってやる。

オマエが命をかけて護りたいモンなら、俺も命をかけて護ってやる。

by・一護

チャドとの約束

「あの藍染を倒したって本当ですか？」

「本当だ。次！」

「一度死神の力を失ったというのは本当ですか？」

「本当だ。次！」

「なんでここにいらっしゃるんですか？」

「明後日から俺たちはここに通うからだ。次！」

「何歳なんですか？」

「それは俺が死んだときのを聞いているのか？それとも今の年齢を聞いているのか？」

「どっちもです。」

「俺が死んだときの年齢は…確か24〜5歳か。今は…70ぐらいか？」

「いや、私に聞かれても…。」

「まあいい。次！」

「斬魄刀は斬月というんですか？」

「そうだ。次！」

「あなたのお父さんが死神というのは本当ですか？」

「そうだ。次！」

「あなたは、朽木副隊長・阿散井隊長とどついう関係ですか？」

「仲間だ。次！」

「そこにいるのは、妹さんですか？」

「そうだ。次！」

「そこにいるのは、井上さんと茶渡さんと滅却師^{クインシー}の石田さんですか？」

「そうだ。次！」

「…。一兄。今ので最後。」

あたしは、さつきから質問攻めにあっている一兄に言った。

「ほんとか、夏梨。」

「うん。」

「は——あ。」

一兄は疲れ切った声を出した。

「なんで恋次あんなこと言ってんだよ。質問攻めにあうのは俺じゃねえか。」

「まさかあんなことになるとは、思わなかったんだよ。わりーな。」

「もういい。」

「ねえ、朽木さん。私たちの教室はどこ？」

織姫ちゃんが周りをきよろきよる見ながら言った。

「そこだ。」

ルキ姉が指を指した。

その教室は、遼がいる教室だった。

てっ、遼。何気に特進クラスだったのか。

一兄も驚いた顔をした。

「マジか。」

一兄がつぶやいた。

*

*

*

*

「此処が明後日からお前らが通う教室だ。」

ルキ姉が言った。

ルキ姉は堂々としていったが一兄たちは入り口で止まっている。

まあ、さっきあんな目にあっただけしょうがない気がするけど。

というか、ルキ姉。周り見てみなよ。

なんか皆ひそひそ話してるよ。

内容は多分…

明後日から一兄たちがこの学校にしかもこの教室に来ることだろう。

皆、一兄が死覇装を着ててあたしたちが普通の流魂街の服を着てる
ってことに気付いてんのかな？

そんなこと関係ないけどさ。

「で、このクラスの責任者は伊土 日凧だ。覚えてか、一護。」

「ああ。多分…。」

一兄の答えがずっとこれだと思うのはあたしだけかな。

一兄は、遠慮がちに教室に入っていた。

「遼、お前このクラスだったのか。」

「うん。じゃなくて、はい。そうです。」

「なんでお前敬語なんだ？」

「いや、有名人ですから…。」

「敬語なんて使うなよ。これからはクラスメイトだからな。」

「そう、かな。」

「そうだ。宜しくな遼。」

「こ、こちらこそ。宜しく。黒崎さん。」

「一護でいいよ一護で。」

「じゃ、じゃあ一護。」

「そうそう。」

「一つ質問していい？」

「なんだ？」

「なんで一護は、死神の姿なのにここに来てんの？」

「俺は、此処に鬼道と、歴史だけ習いに来たんだ。それ以外は〇、
kだからな。」

「ふーん。そうなんだ。」

「なんか、始まっちゃったよ。一兄の自己紹介。」

「そんなの明後日やれって。」

「その時、ルキ姉が一兄に声をかけた。」

「おい、一護。次行くぞ。」

「おう。じゃな、遼。また明後日。」

「うん。じゃあね。一護。」

「一兄はそう言い、こっちに来た。」

そして、ルキ姉が二組のことを話し出した。

「一組の隣が二組だ。二組の責任者は、久仁丘くにおか 杏あんだ。分かったか？」

「ああ。」

「ム。」

石田とチャド兄が言った。

ああ。やっと、責任者の説明、終わったよ。

なんか長く感じた。

なんか他に、説明ってあったかな？

「次は、真央霊術院についてだ。」

まだあんのか。

「はーあ。」

あたしは、だれにも聞こえない程度の大きさで溜息をついた。

「これが最後だ。そう溜息をつくな夏梨。」

ありゃ。ルキ姉に聞こえたみたい。

今の言葉は、あたしの耳元で言ってくれたから一兄たちには聞こえなかったはず。

これで最後！

あたしはそう思いながら、あたしに一言声をかけていつの間にか前を歩いているルキ姉にあたしたちはついて行った。

クラス？（後書き）

短いすね…。

今回は、夏梨目線です。

は——あ。早くみんなを霊術院に通わせたいです。

まだまだか。

それとももう少しか。

後者ですかね。

番外編のほうもよろしくです。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。などなどお待ちしています。

明日

残念なことに 受けた恩を忘れて ヘラヘラしてられるほどクズでもねえんだよ！

by・一護 第2話より

「ここ、『真央霊術院』は、二千年以上の歴史を持ち、未来の鬼道衆・隠密機動・護廷十三隊を作る若者を育成するための学院。課程は6年。飛び級や、院を経由せずに十三隊への入隊もある。かつては死神統学院と呼ばれ、死神のみを育成する機関だったが、組織の巨大化に伴い現在の呼称になっている。学級によってランク分けがあり、試験に於いて最も優秀な成績を認められた者達が集められた「特進学級」もある。」

一護たちは、寮でゆういつ男女が共に過ごせる『共室』^{とぅしつ}にいた。

そこにつくや否や、ルキアはここ真央霊術院について説明を始めた。

もちろんみんなの頭では、ルキアの言ってることが理解できず…。

ルキアに質問ばかりをしている。

その中にはなぜか隊長の恋次もいた。

オマエなんで隊長のくせに此処にいるんだよ。

仕事はどうした。仕事は。

などなど。皆は心の中で思っていた。

「何か質問はあるか？」

「はい。結局のところ俺たちは、霊術院で勉強をすればいいってことだろ。」

一護が聞いた。

「まあ、そういうことになる。ほかに質問は？」

「ありませ——ん。」

代表してたつきが答えた。

周りのみんなはもう疲れ果てている。

遊子なんて半分寝ているようなものだ。

「そうか。じゃあ、今日はこれで終わりにする。今日はいろいろ疲れたからな。」

ほんとだぜ。

一護がそうつぶやいた。

「それじゃあ、各自寮に戻りよく寝ること。明日は校則やら規則やら。頭に叩き込まなきゃいけないものがたくさんある。みな、よく寝ておくように。それでは、散。」

そう締めくくり、ルキアは十三番隊舎に瞬歩で戻っていった。

恋次も、瞬歩で三番隊へ。

一護たちはみんな思った。

‘ ‘ 此处で瞬歩使っていいのかよ！ ‘ ‘

ルキアたちが使っていたんだからおれたちも使っていいはず。

そう思いみんなは瞬歩で自分の部屋に戻った。

*

*

*

*

「は――。疲れた。」

たつきが言った。

「ほんとだよね。たつきちゃん。まさか朽木さんがこんな時間まで講習会をやるなんてね。」

「ほんとだよ。でも内容は難しいからあんまし入ってないんだけどね。」

べえ

夏梨はちよこつと舌を出しながら言った。

「ほら遊子。起きて。」

夏梨は、半分寝ている遊子を起こした。

夏梨は遊子をおぶって瞬歩してここ「桔梗の間」まで連れてきたのだ。

「ん…。う—ん。あれ、夏梨ちゃんおはよー。今何時？」

「今は、十二時二十六分。真夜中のね。」

「真夜中の…。」

遊子は一気にすべてを思い出したようだ。

「あ———！！もう、講習会終わっちゃった？」

「うん。」

「疲れたね。早く寝ようよ。」

遊子が言った。

あんた今まで眠ってたでしょ。

夏梨は思った。

「だから今から寝るの。でも、あたしはシャワーを浴びるけどね。」

「えっ。ここってシャワーあるの。」

「なかったでしょ。遊子。あたしはお湯を浴びるっていったの。」

ポン ポン

なぜか、わかった時に出る音が二回聞こえた。

どうやら織姫ちゃんも遊子と同じことを考えていたようだ。

この二人は、気品じゃなくて天然か。

夏梨はそう思いつつ部屋についているお風呂に向かった。

*

*

*

*

「今日は、疲れたぜ。」

一護がボタンと布団の上に倒れた。

「ほんとだね。一護。まさか朽木さんが。」

「あんな熱心だとは思わなかった…か。」

「あたり。」

一護は、水色の言葉を引き継いだ。

「もう俺は寝る！お休み。」

「お休み一護。」

「お休み。俺ももう寝るわ。」

「む。」

「僕は風呂に入る。」

そう言い、石田は風呂に向かった。

「なんだよあいつ。これからあいつと同じ部屋で一年間過ごすなんて嫌だな。」

一護のこの一言でみんなの今の心中を語った。

*

*

*

*

次の日

「起きろ——！！！」

ルキアが威勢よく遊子たちがいる部屋に入ってきた。

時間は八時ジャスト。

「もう起きてるよ。」

そう言い、夏梨は起き上がった。

ほんとは、ルキアが来る一時間ぐらい前から起きていたのだ。
変な夢にうなされて。

「ん——。おはよ。ルキアちゃん夏梨ちゃん。」

「おはよ。遊子。」

夏梨の次に遊子が起きた。

その次にたつき。

最後に織姫。

「さあ、今日もみんなでいろいろやろう！」

ルキアが元気よく言った。

色々って何？

皆はこの言葉を聞いたときこう思ったのだ。

*

*

*

*

「起きろ〜。」

男子寮にも女子寮にルキアがきたのと全く同じタイミングで、黒い死覇装をまといその上には白い羽織を羽織った赤い髪の毛のつんつん頭がきた。

「う、うるせ。」

一護が言った。

「あと五分だけ。」

啓吾が言った。

「もう起きてるよ。」

水色が言った。

「なんだい君たち。はやく起きないか。」

石田が洗面所から叫んだ。

石田の声にむかついたのか一護は飛び起きた。

「黙ってる。」

一護はつぶやいた。

どうやら今の声は聞こえなかったような。

「さあ。今日は制服と教科書と校則だ。みんな頑張れ。」

恋次がそう言い残し瞬歩で消えた。

今日は隊長の仕事をするのか。

一護たちは思った。

*

*

*

*

「今日は、まず最初に制服を配る。着るのは明日だぞ。」

ルキアはそう言い、自分の後ろにある大きな袋の一つに手を付けた。

ああ。死覇装も今日で終わりか。

一護は配られてくる、制服を見ながら思った。

学校の制服なんて何年振りだろうな。

制服を手に取りながら、思った。

「すぐにその制服はしまうこと。ほら、早くしまえ。」

ルキアが言った。

「へいへい。」

「あと、教科書も配るぞ。これはすぐに名前をかけ。」

「ペンがないよ。ルキアちゃん。」

遊子が言った。

「儂が渡す。」

ルキアの後ろで声が聞こえた。

夜一さん……。今日は猫の姿だ。ほんと、どこにでもいるな。

皆は心の中で思った。

「ほれ、ほれ、」

夜一はそんなことお構いなしに口にペンを加え皆の机の上に配っていった。

そしてすべての教科書を、配り終え名前を書き制服とともにしまいそして校則などの説明を聞いた。

校則は「廊下で鬼道を使ってはならない。」とか

「勝手に寮に帰らない。」とか。

普通だった。

そして、今日が終わりみんなの学校生活がスタートした。

明日（後書き）

遂に次回から学校生活スタートです！

楽しみにしててください。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエストなどなどお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8579x/>

A new adventure and bonds

2011年11月4日08時17分発行